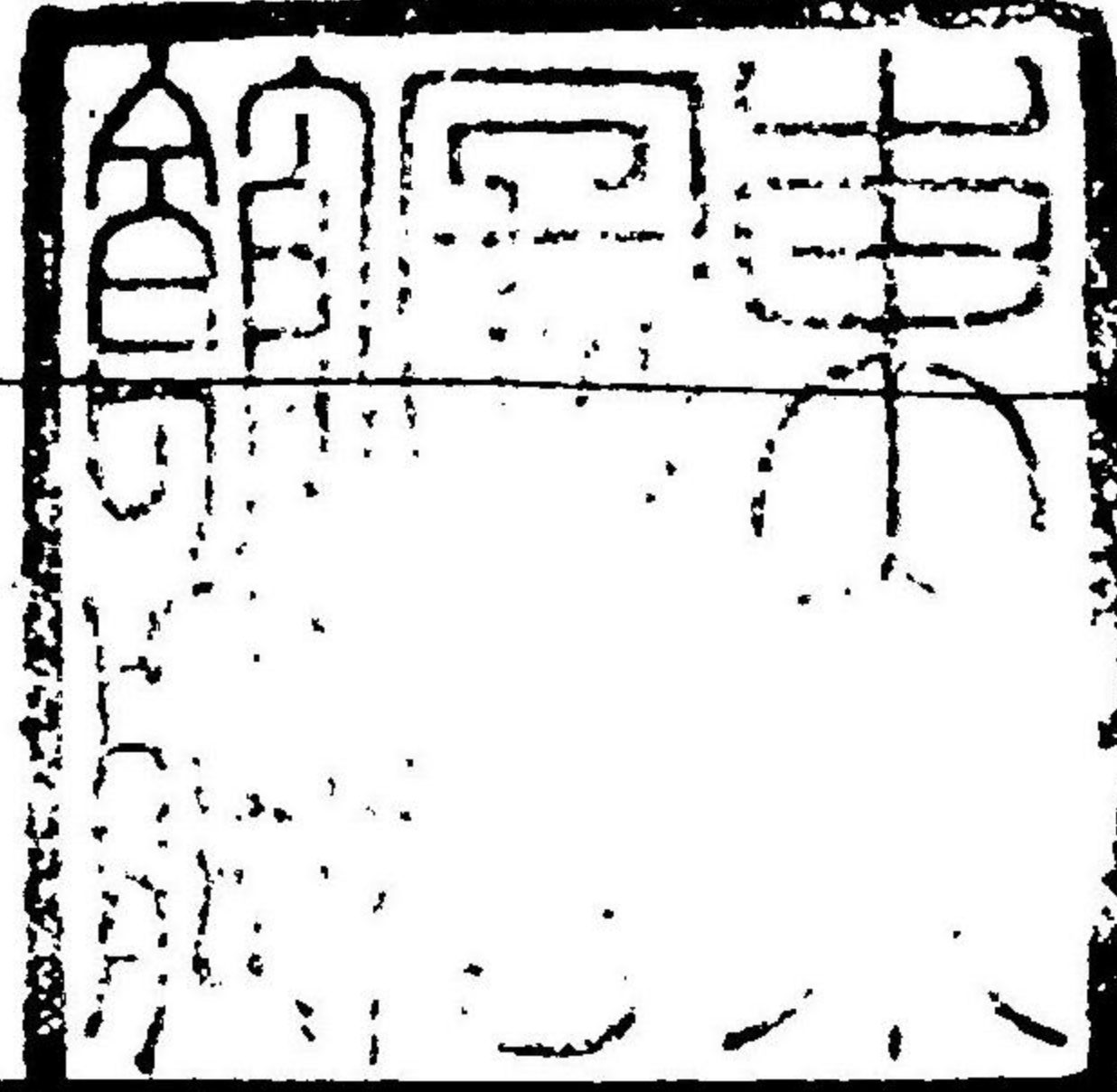


16
26

東 京 國 書 館				
16	26	10	19	
冊	号	架	函	類

大日本租稅志

二十七



大日本租稅志卷之五十九

大藏權少書記官正七位野中準等修



按邦言サシ又モノサシト曰フ物ヲ指シ渡シテ
 長短ヲ度ルノ義ナリ上古未タ有ラザル時
 指ヲ以テ其長短ヲ知ルノヨリトナリ舒テ大ナル
 カミテ其長短ヲ知ルノヨリトナリ舒テ大ナル
 モノヲ度ルノヨリトナリ舒テ大ナル
 長短ヲ知ルノヨリトナリ舒テ大ナル
 時天御量ナルノヨリトナリ舒テ大ナル
 セリ量邦調ハカモナリ古今要覽ニ出雲風
 土記ノ千尋栲繩此天御量モテ大神ノ宮造リ
 奉ルト云ヘル等ノ證ヲ引テ尺度タルコト
 辨ス然トモ人代ニ至テ猶手指ヲ以テ物ノ長
 ヲ言フ則チ所謂天御量ハ獨リ神代ニ古者地
 ニ傳ラサルナリ田令彙解ニ據ルニ古者地ヲ
 尺高麗尺ナリ用フ而シテ其何ノ時ニ傳ルヲ詳

ニセス蓋シ神功皇后西征ノ後阿直岐王仁等廣
ス所有テ迷ニ以テ地ヲ度ルニ猶此尺ヲ用テ和銅六
シ大寶令ノ時地ヲ令ノ小尺ヲ以テ大尺ト爲シ地ヲ
年ニ至テ改テ尺ヲ用テ爾後選用シテ其制ヲ改メ
度ル等皆此尺ヲ用テ和名抄之ヲマカリカテト剛
ス即チ曲尺是ナリ和名抄之ヲマカリカテト剛
ス其名蓋シ木匠用尺ノ矩形ナルニ超ルナリ古
來尺度ヲ論スルモ尺ノ無慮數十家率子其見解ヲ
異ニス而シテ令集解ハ尤モ古ニ近キヲ以テ之
ニ據リ間マ諸家ノ論說ヲ採摘シ以テ之カ概畧
ヲ示ス

〔神代〕伊弉諾尊伊弉册尊碓敷盧島ニ降居シテ八尋ノ

殿ヲ化作ス日本書紀一

伊弉諾尊帶ル所ノ十握ノ劍ヲ拔キ軻遇突智ヲ斬テ

三段ト爲ス日本書紀一

〔按〕尋ハ即チヒロ握ハ即チツカナリ紀記載ル所
ヲ通觀スルニ大抵握ヲ言ヘハ八握十握尋ヲ言

碓敷盧オノコ
口自ヲ凝ルノ
後通歴ニ云大
八洲以爾ノ名
ナリ
〔軻遇突智〕カグ
ツチ火ノ神ナ
リ

〔柏峽〕豐後風土
記ニ據ルニ同
國直入郡ニ在
リ

〔景行〕天皇十二年十月天皇將ニ賊ヲ討ントシテ柏峽

ノ大野ニ次ス其野ニ石有リ長サ六尺廣サ三尺厚サ

一尺五寸云々日本書紀

〔按〕古昔尺度ヲ舉ルモ此ニ止ラヌ古事記ニ景
行天皇御身ノ長ケ一丈二尺御歴四尺一寸反正
二分ト云ヒ舊紀ニ御木ノ樹長サ九百七十丈
日本武尊身ノ長ケ一丈仲哀天皇十尺及ヒ伊
勢ノ朝日郎物部大斧ノ如クニ射テ楢ニ重甲ヲ穿チ
並ニ身肉ニ入ルコト一寸射テ楢ニ重甲ヲ穿チ

荷田在滿ノ本朝度制畧考ニ云孝徳天皇以前ニ
 用ル所何ナル尺タコトヲ知ルヘカラス古事
 記日本紀等ニ景行仲哀反正天皇等ノ御長ヲ舉
 ケタルコト基々長大ナルカ如キハ蓋シ其尺今
 ヨリ短カラシト但古今相距ルコト甚々遠シ其詳
 得テ考フ可ラヌト符谷望之ノ本朝度量權衡考
 ニ云皇國ノ尺度ヲ用ヒ始メハ未タ何ノ時ナル
 ヲ知ラズ應神天皇雄略天皇ノ世ニ高麗ヨリ工
 織等渡リ來リ仁賢天皇ノ世ニ高麗ヨリ佛工造
 寺工ヲ獻セシ事古事記日本紀ニ見エタリ此時
 必ス尺度ヲモ豫シ來ラシ然トモ唯裁縫營造ニ
 用テ諸物ヲ度ルニアラザルハ修メシ人ノ言ニシ
 物ノ長短ヲ記セシハ皆史ヲ修メシ人ノ言ニシ
 ナ其世々ニ尺度ヲ用ヒシ證トハ爲シ難シト之
 ヲ要スルニ唯丈尺ヲ舉ルノナラヌ寸分ニ及
 ノヲ以テ之ヲ觀レハ度制畧考
 ノ説是ニ近シト謂フ可キナリ

〔孝徳天皇大化二年正月朔日詔凡ソ田長サ三十步廣
 サ十二步ヲ段ト爲シ十段ヲ町ト爲セ凡ソ絹繩絲綿

註ニ一人ノ下
 原本著一人ヲ
 以テ斷ニ充ル
 ノ注有リ

ハ並ニ郷土ノ出ス所ニ隨ヘ田一町ニ絹ハ一丈四町
 ニ匹ヲ成セ長サ四丈廣サ二尺半繩ハ二丈二町ニ匹
 ヲ成セ長廣絹ニ同シ布ハ四丈長サ絹繩ニ同シ一町
 ニ端ヲ成セ別ニ戸別ノ調ヲ收メヨ一戸ニ皆布一丈
 二尺凡ソ官馬中馬ハ一百戸毎ニ一匹ヲ輪セ若シ細
 馬ナレハ二百戸毎ニ一匹ヲ輪セ其馬ヲ買フノ直ハ
 一戸ニ布一丈二尺凡ソ仕丁ハ舊ノ三十戸毎ニ一人
 ナルヲ改テ五十戸毎ニ一人以テ諸司ニ充テ五十戸
 ヲ以テ仕丁一人ノ糧ニ充テヨ一戸ニ庸布一丈二尺
 庸米五斗云々

〔按大化ノ時高麗尺ヲ用ヒ五尺ヲ步ト爲ス出制
 總錄ニ詳ナリ本朝度制畧考ニ云孝徳帝ノ比ヨ

リ用ル所ノ常用尺ハ唐制ニ依テ唐ノ常用尺ナ
 ルヘシ然トモ唐ニハ大尺ニシテ我ニハ小尺ナ
 リ是尺今ノ曲尺ニ同シ和銅六年ニ至テ改テ大
 尺ト稱シ其六分尺ノ五ヲ以テ小尺ト爲ス而シ
 テ其大尺ヲ度地以下ノ常用尺ト爲シ小尺ハ唯
 晷景ヲ測ルニ用ルコト延喜雜式ニ載
 セタルカ如シト今是說ニ從フ乃チ本條舉ル所
 ノ絹縮布ハ皆曲尺ノ度ト爲ス是ヨリ後布帛ノ
 丈尺ヲ言フ者枚舉ニ違フ

〔文武天皇大寶二年三月八日〕始テ度量ヲ天下諸國ニ

頒ツ

類聚日本紀

〔按〕天皇即位ノ四年藤原不比等等ニ勅シテ律令
 ヲ撰定セシム所謂度量ハ即チ令中著ス所令成
 ルニ隨テ之ヲ頒ツナリ

〔令〕内印ハ方三寸五位以上ノ位記及ヒ諸國ニ下ス公
 文ハ則チ印セ外印ハ方二寸半六位以下ノ位記及ヒ

太政官ノ文案ハ則チ印セ諸司ノ印ハ方二寸二分官
 ニ上ル公文及ヒ案移牒ハ則チ印セ諸國ノ印ハ方二
 寸京ニ上ル公文及ヒ案調物ハ則チ印セ令式

〔按〕内印ハ天皇御璽是ナリ外印ハ太政官印是ナ
 リ諸司ノ印ハ中務之印等是ナリ諸國ノ印ハ山
 城國印等是ナリ今曲尺ヲ以テ古來傳ル所ノ御
 璽諸印ヲ度ルニ其定度ニ及ハサルコト一二分
 ナルモノ間マ之有ルモ率チ曲尺ノ度ニ合ヘリ
 唯大寶三年ノ御璽ト云ヒ傳ルモノ有リ曲尺ノ
 方二寸二分ナリ此ヲ以テ三寸ト爲シテ度ヲ起
 セハ其一尺ハ曲尺ノ七寸三分三釐三絲三
 忽不盡ナリ以テ唐ノ小尺ニ據スルモ猶短ヤコ
 ト寸餘ト爲ス本朝度量權衡考此御璽ヲ以テ璽
 造ノ物ト爲セ

凡ソ杖ハ皆節目ヲ削リ去テヨ長サ三尺五寸四ヲ訊
 シ及ヒ常行ノ杖ハ大頭徑リ四分小頭三分管杖ハ大

頭三分小頭二分柳ハ長サ四尺以下三尺以上枿ハ長
サ一尺八寸以下一尺二寸以上〔檢〕

〔按〕和名抄唐令ヲ引テ云管ハ大頭二分小頭一分
半諸杖皆節目ヲ削去シ長サ三尺五寸許ト唐我
曲尺ニ合スル者ヲ以テ大尺ト爲シ諸物ヲ度ル
ニ之ヲ用フ本朝此ヲ以テ小尺ト爲シ諸物ヲ度
ルニ亦之ヲ用フ管杖兩頭ノ少シク異ナルハ蓋
シ制ヲ異ニスルナリ其長ハ則チ粗同シ彼此常
用ト爲スコト亦以テ知ルヘシ

凡ソ官私ノ權衡度量ハ毎年二月大藏省ニ詣テ平校

セヨ京ニ在ラサル者ハ所在ノ國司ニ詣テ平校シ然

ル後用ルコトヲ聽ルセ〔關市令〕

〔按〕職員令ニ據ルニ大藏省權衡度量等ノ事ヲ掌
ル而シテ又左右京職東西市司攝津職皆度量ヲ
掌ルコトヲ記セリ京職ノ集解ニ云其量ヲ掌ル
所以ハ地租ヲ收レハナリ但度及ヒ權衡モ亦掌

凡ソ度ハ十分ヲ寸ト爲シ十寸ヲ尺ト爲シ一尺二寸

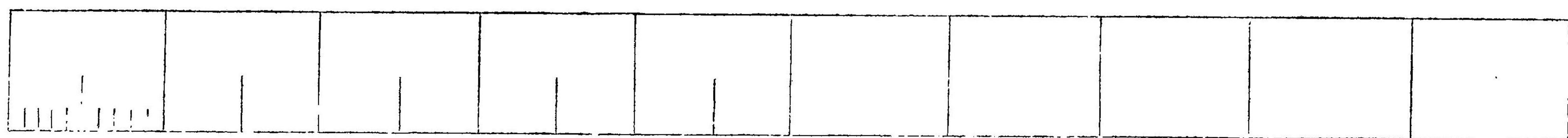
ヲ大尺一尺ト爲シ十尺ヲ丈ト爲セ〔雜令〕

〔按〕義解ニ云度ハ分寸尺丈引ナリ長短ヲ度ル所
以ナリ分寸ハ北方黍ノ中ナル者一黍ノ廣ヲ以テ
分ト爲シ八分寸ヲ一尺ト爲シ十寸ヲ一丈ト爲シ
ナ云度ハ北方黍ノ中ナル者一黍ノ廣ヲ以テ
二分ト爲シ大尺一分ト爲シ十寸ヲ一丈ト爲シ
律歴志ニ云度ハ分寸尺丈引ナリ長短ヲ度ル所
以ナリ分寸ハ北方黍ノ中ナル者一黍ノ廣ヲ以テ
者一黍ノ廣ヲ以テ分寸尺丈引ナリ長短ヲ度ル所
ト一黍ノ廣ヲ以テ分寸尺丈引ナリ長短ヲ度ル所
五度審ナリ尺一寸ト爲シ十分ヲ一丈ト爲シ
開國制度ヲ定ムル時ニ當リ亦其說ニ沿テ李唐
令唐制ヲ採用ス故ニ亦仍テ之ヲ註スル本朝大寶
シテ義解唐令ニ依テ之ヲ言フトハ則チ本朝而

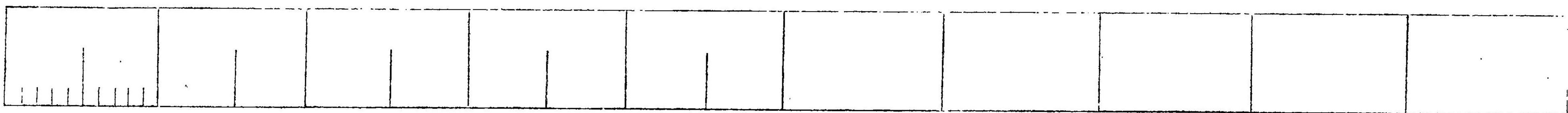
ノ大小尺ハ唐制ニ依リテハ
田令集解ニ云ク五尺ヲ以テ
ノ相當ルト集解ハ山帝ノ時
ハ復タ尺ヲ改メテ五尺ニ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
尺ハ其ノ地ノ尺ハ故ニ一尺
云々本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
ナリト本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
大尺ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺
ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
ルヲ以テ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ
本朝令ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
シテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
考テ尺ノ所ニ八寸ニシテ
ハ曲ノ尺ノ所ニ八寸ニシテ
黍ヲ以テ尺ノ所ニ八寸ニシテ
一黍ノ長トスルハ小録ノ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
ノ相當ルト集解ハ山帝ノ時
ハ復タ尺ヲ改メテ五尺ニ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
尺ハ其ノ地ノ尺ハ故ニ一尺
云々本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
ナリト本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
大尺ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺
ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
ルヲ以テ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ
本朝令ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
シテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依

大尺ハ唐制ニ依リテハ
ノ大小尺ハ唐制ニ依リテハ
田令集解ニ云ク五尺ヲ以テ
ノ相當ルト集解ハ山帝ノ時
ハ復タ尺ヲ改メテ五尺ニ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
尺ハ其ノ地ノ尺ハ故ニ一尺
云々本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
ナリト本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
大尺ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺
ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
ルヲ以テ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ
本朝令ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
シテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
考テ尺ノ所ニ八寸ニシテ
ハ曲ノ尺ノ所ニ八寸ニシテ
黍ヲ以テ尺ノ所ニ八寸ニシテ
一黍ノ長トスルハ小録ノ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
ノ相當ルト集解ハ山帝ノ時
ハ復タ尺ヲ改メテ五尺ニ
タレコト知ルヘシ令ノ尺則チ
尺ハ其ノ地ノ尺ハ故ニ一尺
云々本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
ナリト本朝令ノ尺ハ即チ唐ノ尺
大尺ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺
ニシテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
ルヲ以テ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ
本朝令ノ尺ハ唐ノ尺ニ依
シテ今ノ尺ハ唐ノ尺ニ依

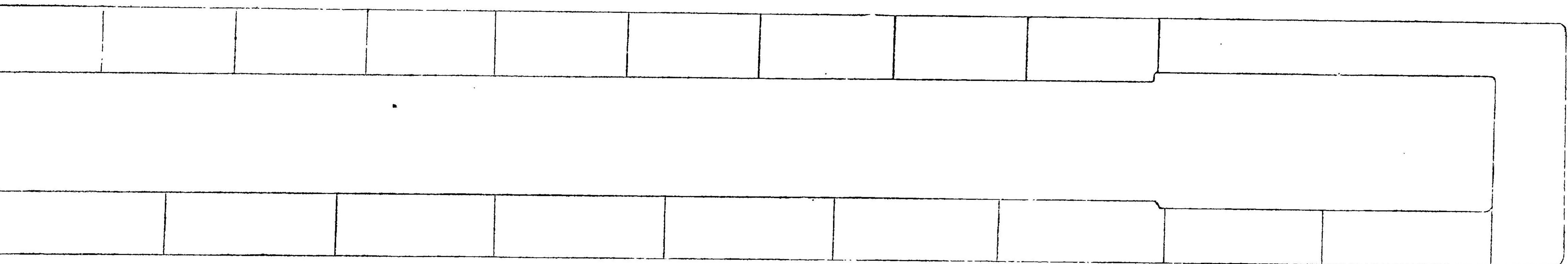
養老尺
小尺



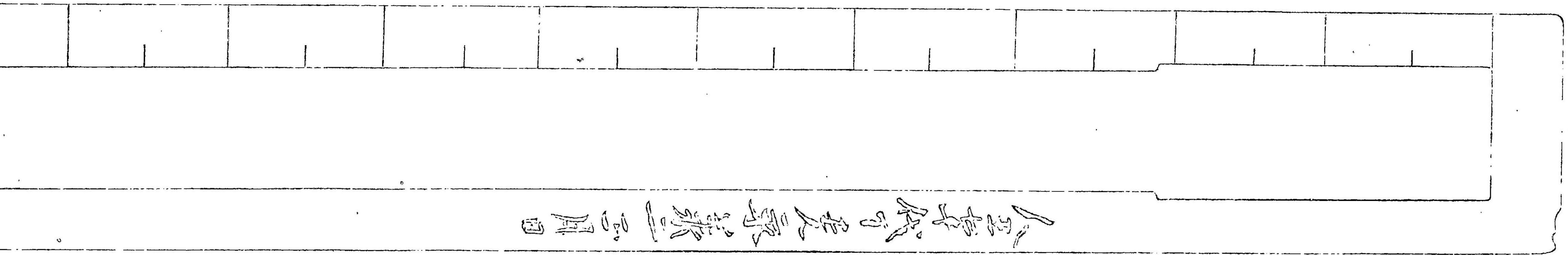
大尺



永承鐵尺
表



裏



永承鐵尺表裏二尺用

凡ソ地ヲ度リ銀銅穀ヲ量ルハ皆大ヲ用ヒヨ此外ハ

官私悉ク小ナル者ヲ用ヒヨ雜令

〔按〕義解ニ云量トハ權衡升斗相兼ルノ稱ナリ文ニ唯銀銅ヲ舉テ金銀ヲ言ハサルハ金ハ銀ヨリ貴ク銀ハ銅ヨリ賤シ即チ貴キモノハ小ヲ用ヒ賤キモノハ大ヲ用フ文ニ言ハスト雖モ亦須ラ准知スヘシト蓋シ地ト穀トハ度量ノ大ヲ用ルコト分明ナリト雖モ金額ハ甄別シ難キヲ以テ義解特ニ之ヲ

凡ソ度量權ヲ用ル官司ハ皆様ヲ給ヘ其様ハ皆銅ニ

シテ之ヲ爲セ雜令

〔按〕官司ハ義解ニ大藏省及ヒ諸國司ノ類ト爲ス様ヲ給フハ獨リ其使用ノミナラス亦以テ平校ヲ取ラシムルカ爲ナリ

凡ソ地ヲ度ルハ五尺ヲ步ト爲シ三百步ヲ里ト爲セ

令雜

〔按當時高麗尺ヲ大尺ト爲シ以テ地ヲ度ル共一尺ハ曲尺ノ一尺ニ寸五分ハ曲尺ノ六尺ナリ三百歩ヲ里ト爲スハ今ノ五町ナリ乃チ公式令ノ行程馬日ニ七十里ハ今ノ九里ニ六十町歩五十里ハ今ノ六里三十四町車卅里ハ今ノ四里六町ナリ其餘里程ヲ言フモノ皆此ニ倣ヘ

〔元明天皇和銅元年八月丙申制〕自今以後衣ノ襟口ノ

闊サ八寸已上一尺已下人ノ大小ニ隨テ之ヲ爲セ日

紀本

〔按襟口ハ袖口ナリ拾芥抄實龜六年ノ格ヲ引テ云袍ノ袖口ノ闊サ五位已上ハ一尺ヲ限ト爲シ六位已上ハ八寸女亦此ニ准ス又長保元年ノ官符ヲ引テ云袖ノ闊サ一尺八寸以下ト蓋シ古今制ヲ異ナリニ

〔六年二月十九日〕始テ度量調庸義倉等ノ類五條ノ事

丙申三正餘覽
ニ據ルニ國八
月七日ナリ原
書恐クハ脱落
ナラン

ヲ制ス類日本紀

〔四月十六日〕新格并ニ權衡度量ヲ天下諸國ニ頒下ス

類日本紀

〔按田令集解和銅六年二月十九日ノ格ヲ引テ云其地ヲ度ル六尺ヲ以テ歩ト爲ス又云格ニ六尺ヲ以テ歩ト爲ス六尺積歩ト者ハ則チ是レ令ノ五尺内ノ積歩名ヲ六尺積歩ト改ルノニ其地ニ於テハ損益スル所無シト積歩ト令ハ五尺ヲ以テ歩ト爲シ格ハ六尺ヲ以テ歩ト爲ス而シテ地ニ於テ損益スル所無キハ格ノ尺令ノ尺ノ六分ノ五ニ當ルナリ又集解高麗ノ尺令ノ尺ノ六分ノ五ニ當ル云フニ據レハ此時令ノ小尺ヲ以テ大尺ニ准スト其六分ノ五ノ尺ヲ以テ小尺ト爲スナリ延喜式觀ル所之ニ同シ其權衡度量ヲ頒下スルハ蓋シ制度ヲ變スルヲ以テナリ

〔七年二月二日〕上總國言ス京ヲ去ルコト遙遠ニシテ

貢調極テ重シ請フ細布ニ代テ頗ル負擔ヲ省カシ其

長サ六丈闊サ二尺二寸丁毎ニ二丈ヲ輪シ三人ヲ以テ端ヲ成サント之ヲ許ス續日本紀

按屋代弘賢ノ古今要覽ニ云法隆寺ニ現存セル聖武天皇ノ御茵ノ裏ノ細布即チ曲尺二尺二寸餘アリ裁縫ノ後年ヲ經タレハ延ヒタルニモ有ルヘシト亦以テ其常用尺ヲ徵スヘシ

〔元正天皇養老四年五月廿一日〕尺様ヲ諸國ニ頒ツ續日本紀

按本條唯尺様ヲ頒ツコトヲ言テ修制ノ意ヲ見ス是時和銅六年ヲ距ルコト未タ遠カラス仍テ尺様ヲ頒テ以テ其範ヲ取ラシムルナリ其模尺前ニ出ス今徵スルニ足ル者ハ此ニ由レルナリ

〔聖武天皇天平七年四月廿六日〕入唐留學生從八位下上道朝臣眞備測影鐵尺一枚ヲ獻ス續日本紀

按唐其小尺ヲ以テ法尺ト爲シ唯律冠冕ヲ製シ及ヒ曇影ヲ測ルニ之ヲ用フ眞備ノ獻スル所其

尺々ルコト知ルヘキナリ

〔稱徳天皇寶龜元年四月廿六日〕初メ天皇八年ノ亂平シトキ乃チ弘願ヲ發シテ三重ノ小塔一百萬基ヲ造ラシム高サ各四寸五分基徑リ三寸五分露盤ノ下ニ各根本慈心相輪六度等ノ陀羅尼ヲ置ク是ニ至リ功畢テ諸寺ニ分チ置ク續日本紀

按八年ノ亂ハ天平寶字八年惠美押勝ノ亂ヲ謂ナリ本朝度量權衡考ニ小塔ヲ度テ曲尺ノ度ニ合フモノ有リト云ヘリ

〔桓武天皇延暦十七年十月二十日勅〕度量權衡先ニ定製有リ平校シテ行ヒ用フ亦令條ニ具ス然ルニ所司怠慢ニシテ曾テ遵行セス大小意ニ任セ輕重人ニ由

ル收納溢多ク蠹害尤モ甚シ自今以後宜ク此弊ヲ改
テ升尺等ノ類ハ大藏省ニ就キ法ニ依テ平校シ永ク
奸源ヲ絶ツヘシ若シ此制ニ違ハ、**□**嚴科ニ寘ケ
史國

〔按〕古昔度量ノ今ニ傳ル者大小一ナラス殆ト眞
ヲ亂ルニ至レリ今此勅ニ據テ之ヲ考ルニ奸吏
ノ多キニ由レルナリ

〔式〕凡ソ樂器絃料ノ絲和琴一面 長サ六尺二寸 二
寸 長サ六尺二寸 二寸 長サ六尺二寸 二寸 長
三尺七寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
尺五寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
尺四寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
尺三寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
尺二寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
尺一寸 分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長
分 第一面 長サ六尺二寸 二寸 長

〔阮咸〕琵琶ノ如クニシテ類曲ヲサレモノ
〔箏〕和琴ノ如クニシテ類曲ヲサレモノ
〔箏〕和琴ノ如クニシテ類曲ヲサレモノ
〔箏〕和琴ノ如クニシテ類曲ヲサレモノ

〔新羅琴〕和琴ノ如クニシテ類曲ヲサレモノ

凡ソ度量權衡ハ官私悉ク大ヲ用フ但晷景ヲ測リ湯
藥ヲ合スルハ則チ小ナル者ヲ用フ其度ハ六尺ヲ以
テ歩ト爲ス以外ハ令ノ如シ雜式

凡ソ度量權衡等ハ朝集使ニ附ケ大藏省ニ就テ依均
平校シ官ニ申シテ頒下ス延喜內外交替式

〔按〕令ノ制在京ノ人ハ大藏省ニ詣テ平校シ外國
ノ人ハ其國司ニ詣テ平校ス延曆以後皆大藏省
ニ就テ法ヲ取ラシム而シテ前條所謂度量權衡
ハ即チ和銅以來ノ法ト爲ス是時並ニ著シテ以
テ式ト爲スナリ是ヨリ後復々度制ヲ變更スル
コト無シト雖モ武家ノ時ニ至テ年歴久遠其常
用尺小差ヲ生スルモノ無シトセテ年歴久遠其常
中ニ詳ナリ而シテ小尺ハ其用少キヲ以テ後世
漸ク廢
絶セリ

衡考ニ云令前ノ大升ハ唐壹ニ據テ定メル減大
升ヨリ以前ニ用タル量ニシテ大化以前モ通用
シタル量ナルヘシ其制ハ上古ヨリ用ヒ來リシ
ヤ或ハ六朝ノ制ニ依リシヤ或ハ三韓ノ制ニ依
リシヤ今皆知リ難シト雖モ大概ハ崇峻帝ノ時
傳ヘタル權衡ニ依リテ舒明帝ノ時ニ斗升斤兩
定ムトアルハ即チ此大升ノ時ニ斗升斤兩等
ノ書明ニ令前ノ量ヲ謂テ大升ト爲シ令集解等
謂テ減大升ト爲ス是ニ由テ大升ト爲シ令集解等
説テ當レリト爲ス蓋シ當時高麗尺ヲ以テ地ヲ
度ル其尺度唐制ヨリ大ナリ直ニ唐量ヲ用ヒ難
ト故ニ此ニ依準シテ稍其製ヲ大ニス之ヲ大升
ト爾ナリ是量即今ノ京升六合零二撮有奇ニ當
ト參觀スヘシ按

〔孝德天皇大化二年正月朔日詔〕云々段ノ租稻二束二

把町ノ租稻二十二束

〔按〕是時田長サ三十步廣サ十二步ヲ段ト爲シ十
段ヲ町ト爲ス而シテ其租稻本條言フ所ノ如キ

ナリ束稻春サ米五升ヲ得是時二束二把ヲ以テ
段ノ租ト爲シ二十二束ヲ以テ町ノ租ト爲スハ
是ヨリ先ノ大升ヲ廢シテ減大升ヲ用ルナ
リ此量京升ノ四合一勺八撮有奇ニ當レリ

〔文武天皇大寶二年三月八日〕始テ度量ヲ天下諸國ニ

頒ツ本紀日
〔按〕同書白雉三年ノ條ニ云段ノ租稻一束半町ノ
租稻十五束ト乃チ大化ノ減大升ヲ廢シテ復タ
大升ヲ用フ是レ令前大升ノ稱有ル所以ナリ令
ニ至テ又之ヲ廢シテ大化ノ減大升ヲ用フ故ニ
田令ニ云段ノ租稻二束二把町ノ租稻二十二束
ト皆制地ニ隨テ其量ヲ異ニスルナリ此條所謂
條ニ在ルモノナリ

〔令〕調ノ副物十四丁ニ樽一枚三斗ヲ受ク廿一丁ニ樽

一枚四斗ヲ受ク卅五丁ニ樽一枚五斗ヲ受ク ○賦役令

唐條中ニ具レリ

粟稻豆令所謂穀ヲ量ルハ大ヲ用ルニ據ルニ本
 朝度量權衡考ニ依レハ其六升ハ今ノ一斗ニ
 九合ニ勺八撮而シテ別ニ乾草五圓ノ一斗一
 給ス豈勝テ食フ可シヤ故ニ又小升ヲ用ルノ
 有リ乃今ノ三升合七勺八撮ニ當レリ又其
 所謂唐量ニ依レハ二升合八勺二撮ニシテ其
 考ノ所謂唐量ニ據レハ二升合八勺二撮ニ
 粗其率ヲ同フ然レモ所充竟鐘ノ一勺強ト爲
 ラス尺亦關係スルモ所充竟鐘ノ一勺強ト爲
 從フ古來是量ヲ稱シテ減大升ト爲ス意フニ
 前ノ大升ニ別令ノ小升ト爲シ藤井貞幹ノ京
 六合四勺量ヲ別令ノ小升ト爲シ藤井貞幹ノ京
 ヲ大升ト爲シ別令ノ小升ト爲シ藤井貞幹ノ京
 中本村欽ノ積六二五ノ合六勺量ヲ令ノ大升ト
 藤本康ノ三合三勺九撮量ヲ令ノ大升ト爲シ
 ハ香其據ル所ヲ詳ニセシ故ニ指テ大升ト爲シ
 〔元明天皇和銅六年四月十六日〕新格並ニ權衡度量ヲ
 天下諸國ニ頒下ス類聚日本紀
 〔按是歲二月度量調庸義倉ノ類五條ノ事ヲ制ス
 故ニ之ヲ頒下スルナリ租稅沿革篇ニ云和銅六

年改定ノ度ノ大小尺ハ唐ノ大小尺ニテ其大尺
 ハ大寶令ノ小尺ニ等ヤコト延喜式ノ文ニテ
 明ナリ量ハ却テ大寶令ニ唐ノ大寶令ノ文ニテ
 ヲ是時ニハ令前ノ大寶令以テ大寶令トシテ
 リト田令圖解抄ニ云大化已前ノ量ハ所謂大升
 ナリ白雉和銅弘仁延喜皆是ナリト皆田令榮解
 等ニ據テ言フ所
 從フヘキナリ
 〔聖武天皇天平勝寶元年正月四日〕比年類ニ亢陽ニ遭
 ヒ五穀登ラス官人ノ妻子多ク飢乏スルコト有リ是
 ニ於テ文武官及ヒ諸家司ニ米ヲ給フコト人別月ニ
 六斗續日本紀
 〔按諸家司トハ諸大夫ニシテ執柄家ノ職事一任
 セラル者ナリ當時ノ六斗ハ京升ノ三斗六升
 強ニ當レリ凶荒飢乏ヲ救ハンカ爲メ人別月コ
 トニ之ヲ給フハ多ニ過ルカ如シト雖モ五穀登
 ラスシテ年料ヲ給フ無ク且其官吏ノ家々ルヲ
 以テ之ヲ優賜シ以テ其飢ニ阻ムト用ニ乏ナト

ヲ周クス
ルナリ

〔桓武天皇延暦八年六月九日〕征東將軍奏シテ曰ク河
陸兩道ノ輜重一萬二千四百四十人一度運スル所ノ
糒六千二百十五斛征軍二萬七千四百七十人一日食
スル所五百四十九斛此ヲ以テ支度スレハ一度運ス
ル所僅ニ十一日ヲ支フ

續日本紀

〔按〕孫子ニ云敵ノ一鍾ヲ食スレハ吾二十鍾ニ當
ルト之ヲ解スル者云轉輸ノ法千里ニ糧ヲ輸セ
ハ二十ヲ費シテ一ヲ得ルト是レ輜重ノ人費ス
所尤モ多キヲ謂フナリ此條五百四十九斛ハ輜
重ノ人ヲ併セテ之ヲ言フ乃チ三九九一ヲ以テ
五百四十九斛ヲ除スレハ一人當ル所一升ニ合
七勺五撮強今ノ量ノ
八合二勺八撮強ナリ

〔仁明天皇承和十三年十二月廿九日勅〕延暦寺定心院

ノ三寶並ニ梵王帝釋供養料毎日白米壹斗伍升伍合
僧十人毎日白米陸斗肆升燈分油毎日貳合

續日本後紀

〔按〕十人ニ白米六斗四升ヲ給フハ人コトニハ升
四合ニシテ今ノ三升八合五勺六撮餘ニ當ル是
レ唯食料ノミナラス猶後世一人ニ數口米ノ廣
スルカコトシ延喜主稅式安居供養ノ條ニ口ニ
飯料二升鹽粥四合雜餅四升ヲ給フノ
文有リ蓋シ以テ之ヲ優待スルナリ

〔清和天皇貞觀七年五月廿六日勅〕沙門賢基修行年久
ク多武峯墓邊ノ寺ニ居住ス宜ク大和國ヲシテ止稅
稻ヲ以テ日ニ米一升二合ヲ給シテ其供料ニ充フシ

ムヘシ三代實錄

〔按〕一升二合ハ今ノ七合
二勺三撮強ニ當レリ

〔陽成天皇元慶五年三月廿六日〕是ヨリ先キ出羽國司

言ス太政官去年六月十六日國ニ下ス符ニ曰ク彼國ノ解ニ云ク兵士鎮兵總テ一千六百五十人鎮兵六百五十人毎ニ日糧一升六合ヲ充テ或ハ二城ノ兵士一千人毎ニ日糧八合ヲ充テ分テ六番ニ結ヒ國府ニ直ス而シテ承前國吏健兒ヲ以テ戎ト爲シ兵士鎮兵ハ一人ヲ置クコト无シ仍テ諸郡ヲシテ勇敢ノ者ヲ進メシム但鎮兵ハ舊ト長上ノ料有リ兵士千人ヲ訓練シテ長上ノ糧ヲ給スルヲ煩スコト无ク一府二城以テ非常ニ備フ云々三代實錄

〔按〕日糧八合ハ今ノ四合八勺ニ據強ニ當レリ其而シテ延曆征軍ノ法ニ較スレハ足ヲサレカ如ク然リ蓋シ彼ハ征戰ヲ以テ之ヲ多クシ此ハ屯

成ヲ以テ平食ヲ給スルナリ

〔式〕凡ソ山城國大原野社神殿ノ守二人ハ糶米日ニ各二升預從一人ハ日ニ八合大和國春日社神殿ノ守二人ハ日ニ各二升預從二人ハ日ニ各八合並ニ當國官田ノ地子ヲ以テ之ニ充ツ主稅式

〔按〕二升ハ今ノ一升二合五撮強ニ當リ八合ハ今ノ四合八勺ニ據強ニ當レリ式八合ヲ以テ一人ノ日ノ食料ト爲スコト此條ヲ以テ知ルヘシ是ニ由テ之ヲ觀レハ凡ソ是率ニ過ルモノハ皆優待ニ出ルナリ

凡ソ公私ノ運米ハ五斗ヲ俵ト爲ス仍テ三俵ヲ用テ馱ト爲ス雜式

〔按〕和銅以來令前ノ大升ヲ以テ常用量ト爲ハ式著ハス所之ニ同シ乃チ是五斗ハ京升ノ三斗強

ヲ定ム然トモ何ノ制ナルコトヲ傳ヘス令式蓋
 シ此ニ依テ之ヲ詳ニスルナラシテ而シテ令ハ小
 稱ヲ以テ常用ト爲シ式ハ大稱ヲ以テ常用ト爲
 ス令ハ之ヲ計ルニ銖兩斤ヲ以テス唯是ヲ異ナリト爲ス計
 ルニ銖分兩斤ヲ以テス其貫奴ノ目ヲ用ルハ蓋シ
 ノ制傳テ後世ニ至ル共貫奴ノ目ヲ用ルハ蓋シ
 近古ニ在リト云フ而シテ小稱今ニ傳ハ
 ヲサレハ其用廣カラサルヲ以テナリ

〔崇峻天皇〕上毛野久比吳國ニ遣サレ雜寶物等ヲ天皇

ニ獻ス其中ニ吳權有リ天皇此物ヲ勅ス久比奏シテ

日ク吳國以テ萬物ヲ懸ケ定テ交易セシム其名ヲ波

賀理ト云フト天皇之ニ勅ス他人ヲシテ同クセシム

ルコト勿レト新撰姓

〔按〕天皇ノ元年ハ隋ノ開皇八年ニ當レリ所謂吳
 權ハ當ニ是レ隋ノ制ナルヘシ但波賀理トハ邦
 言ヲ以テ之ヲ名イフナリ他人ヲシテ同クセシム
 ムルコト勿レトハ獨リ其家ニ秘藏セシムルナリ

〔推古天皇十三年四月朔日〕天皇皇太子大臣及ヒ諸王

諸臣ニ詔シテ共ニ同ク誓願ヲ發シ以テ始テ銅繡丈

六ノ佛像各一軀ヲ造ラシム乃チ鞍作鳥ニ命シテ造

佛工ト爲ス是時高麗國大興王天皇佛像ヲ造ルト聞

テ黃金三百兩ヲ貢上ス日本書紀

〔按〕三百兩ハ高麗國ノ衡法ヲ以テ之ヲ言フ
 ヲノ、如シ其制得テ考フ可ラサルナリ

〔舒明天皇十二年十月〕始テ斗升斤兩ヲ定ム扶桑略記

〔按〕是歲ハ唐ノ貞觀十四年ナリ姓氏錄ニ據ルニ
 帝ノ時上毛野久比ノ男宗麻呂ニ姓尸商長首ヲ
 賜フ蓋シ其父義ニ吳權ヲ得テ家ニ傳フ因テ其
 子ヲシテ權衡ヲ掌リ以テ市井賣買ノ事ヲ監セ
 シムルナリ當時唐ニ遣ス者前後數人而シテ隋
 ノ時得タル所ノ吳權ヲ有スルモノヲシテ尙事

ヲ定ム然トモ何ノ制ナルコトヲ傳ヘス令式蓋
シ此ニ依テ之ヲ詳ニスルナラシテ而シテ令式小
稱ヲ以テ常用ト爲シハ大稱ヲ以テ常用ト爲
ス令ハ之ヲ計ルニ銖斤ヲ以テ其價勿ノ目ヲ用ルハ蓋
ノ制傳テ後世ニ至ル其價勿ノ目ヲ用ルハ蓋
近古ニ在リト云フ而シテ小稱今ニ傳ハ
ヲサレハ其用廣カラサルヲ以テナリ

〔崇峻天皇〕上毛野久比吳國ニ遣サレ雜寶物等ヲ天皇
ニ獻ス其中ニ吳權有リ天皇此物ヲ勅ス久比奏シテ
日ク吳國以テ萬物ヲ懸ケ定テ交易セシム其名ヲ波
賀理ト云フト天皇之ニ勅ス他人ヲシテ同クセシム
ルコト勿レト新撰姓氏錄

〔按〕天皇ノ元年ハ隋ノ開皇八年ニ當レリ所謂吳
權ハ當ニ是レ隋ノ制ナルヘシ但波賀理トハ邦
言ヲ以テ之ヲ名イフナリ他人ヲシテ同クセシ
ムルコト勿レトハ獨リ其家ニ秘藏セシムルナ

〔推古天皇十三年四月朔日〕天皇皇太子大臣及ヒ諸王
諸臣ニ詔シテ共ニ同ク誓願ヲ發シ以テ始テ銅繡丈
六ノ佛像各一軀ヲ造ラシム乃チ鞍作鳥ニ命シテ造
佛工ト爲ス是時高麗國大興王天皇佛像ヲ造ルト聞
テ黃金三百兩ヲ貢上ス日本書紀

〔按〕三百兩ハ高麗國ノ衡法ヲ以テ之ヲ言フ
ヲノ、如シ其制得テ考フ可ラサルナリ
〔舒明天皇十二年十月〕始テ斗升斤兩ヲ定ム扶桑略記
〔按〕是歲ハ唐ノ貞觀十四年ナリ姓氏錄ニ據ルニ
帝ノ時上毛野久比ノ男宗麻呂ニ姓尸商長首ヲ
賜フ蓋シ其父囊ニ吳權ヲ得テ家ニ傳フ因テ其
子ヲシテ權衡ヲ掌リ以テ市井賣買ノ事ヲ監セ
ノ時得タル所ノ吳權ヲ有スルモノヲシテ商事

ヲ監セシム是ニ由テ之ヲ觀レハ本條定ル所ノ
斤兩ハ階稱ヲ用ヒ而シテ亦唐制ニ依ルナリ後
數年大化ノ時ニ至リ大政ヲ張皇シテ多ク唐制
ヲ採スルコト知ルヘシ其制大實雜令載ル所即
依準スルコト知ルヘシ其制大實雜令載ル所即
モ是ナリ而シテ知ルヘシ其制大實雜令載ル所即
ヲ大有一斤ト爲令集解ニ見エタリ大十斤ト云
ト爲一斤ト爲一斤ト爲一斤ト爲一斤ト爲一斤ト
稱ヲ以テ之ヲ言フ大稱ト爲七斤ト八斤ト九斤
チ一升強ハ百六十兩是ヲ成斤ト謂フ其米今ノ
三升強ニ當ル不成就ハ此日租法ヲ以テ之ヲ推
ノ二升強九勺強ニ當ル不成就ハ此日租法ヲ以テ
ニ大化前及ヒ白雉和銅以下成斤ヲ以テ之ヲ推
及ヒ大化前及ヒ白雉和銅以下成斤ヲ以テ之ヲ推
成斤ヲ用ヒタリ

〔孝德天皇大化二年正月朔日詔〕段ノ租稻二束二把町
ノ租稻二十二束日本紀

〔按〕是レ不成斤ノ法ニ依ルナリ乃チ一束ノ重サ
大百十兩一不成斤ノ法ニ依ルナリ乃チ一束ノ重サ

勿不盡米ト爲シテ今ノ二升九勺強一升ノ重ヲ
四百目ト爲セハ米ノ重ヲ八百三十六匁ト爲
シ其餘ヲ釋ノ
重ト爲スナリ

〔白雉三年〕段ノ租稻一束半町ノ租稻十五束日本紀

〔按〕是レ成斤ノ法ニ依ルナリ乃チ一束ノ重サ大
百六十兩今ノ一貫六百匁ト爲ス米ト爲シテ今
勿餘ニシテ其餘釋ノ重ナリ

〔齊明天皇五年〕高麗ノ使人熊皮一枚ヲ持テ其價ヲ稱

シテ曰ク綿六十斤ト市司笑テ避ケ去ル日本紀

〔按〕是時大小衡未タ孰レヲ以テ常用ト爲スコト
ヲ詳ニセズ大實令小稱ヲ以テ常用ト爲スコト
近江ノ朝ニ創製ス是歲近江朝ニ先ツコト遠カ
ラサルヲ以テ之ヲ考レハ應ニ小稱ヲ常用ト爲
スヘシ乃チ六十斤ハ今ノ三貫百九十九匁ト爲
ナリ而シテ綿ハ蘭綿ナリ市司因テ其價ヲ貴シ
ト爲ス

〔令〕段ノ租稻二束二把町ノ租稻廿二束 令田

〔按〕令不成斤ヲ以テ束ヲ成ヌ大化ノ制ト同シ

凡ソ調ノ絹絶絲綿布ハ並ニ郷土出ス所ニ隨ヘ云々

絲ハ八兩綿ハ一斤並ニ二丁ニ約屯ヲ成セ云々 賦役

事調庸條中ニ具レリ

〔按〕令小稱ヲ以テ常用ト爲セハ絲一約ハ大五兩

八絲ニシテ今ノ五十三匁三分三釐三絲三

忽不盡綿一屯ハ六十兩十六絲六忽不盡ナリ

凡ソ稱ヲ用ル者ハ皆格ニ懸ケヨ粉麵ハ則チ之ヲ稱

セヨ 關市

〔按〕義解ニ云格ハ横木稱ヲ懸ル所以ナリ米屑ヲ粉ト曰ヒ麥屑ヲ麵ト曰フト其格ニ懸ケ之ヲ稱スルハ皆以テ私私

奸ヲ防クナリ

權衡ハ廿四銖ヲ兩ト爲シ三兩ヲ大兩一兩ト爲シ十
六兩ヲ斤ト爲セ 令雜

〔按〕義解ニ云 秬黍ノ中ナルモノ百黍ノ重ヲ以テ秤權
銖ト爲シ二十四銖ヲ兩ト爲シ三兩ヲ大兩一兩ト爲シ十
六兩ヲ斤ト爲セ 爲シ十兩ニ起ル一合ニ二百黍ヲ知ル
所以ナリ本
ナリ物ヲ稱リ平施シテ漢志ニ云權ハ銖兩斤鈞石
ト黄鐘ノ重ニ起ル一合ニ二百黍ヲ知ル所以ナリ本
二銖之ヲ兩ニスルヲ兩ト爲シ十斤ニ爲シ十鈞ト
爲シ十石ト爲スルヲ斤ト爲シ十兩ト爲シ十鈞ト
因テ石ト爲スルヲ斤ト爲シ十兩ト爲シ十鈞ト
一兩ニ開元錢ノ分ニ今ニ存スル大十錢ヲ開元通寶
サニ開元錢ノ分ニ今ニ存スル大十錢ヲ開元通寶
度量權衡考ニ云六典鑄監ノ注ニ皇朝武德中朝
悉ク五銖ヲ除テ更ニ開元通寶ヲ鑄ル開元中朝
濫惡ニシテ江淮間尤モ甚キヲ以テ勅有テ錢法
ヲ禁斷ス一千每ニ重サ六斤四兩近コ口錢ル所

多クハ重キ七斤ト云ヘリ此ニ據レハ一匁ニ餘
 ノ者ハ重キ七斤ノ錢ニシテ八九分ノ者ハ江
 ノ濫惡錢ナラシク然ラハ今ノ一匁ハ唐ノ大稱
 二銖四菜ニシテ即チ宋以後ノ一錢ナリト是
 說ニ依ルヲ生觀ノ衡考ニ云宋開元通寶ニ依
 錢ヲ造リ秤ヲ定ム所謂十錢ヲ積テ重キ一兩
 造ルノ則チ爲ス所謂十錢ヲ積テ重キ一兩ハ
 ノ秤ニ同シト明ケシ今ノ秤一錢ノ日開元錢ニ
 ルコト輕重無キコト知ルヘシト中村欽ノ防
 三器通放ニ云開元錢一錢ハ今ノ秤ニ半以
 ヲ得即チ二銖四菜ナリ此錢今ノ世存スルモ
 多シ而シテ重キ一錢ニ及フモノ幾ント希ナ
 乃チ更鑄私鑄ニ出ル者多ニ居ルノミト是レ
 唐稱ヲ以テ今ノ稱ト爲スナリ今ノ稱目算
 スレハ則チ左ノ如シ而シテ是レ今ノ稱目算
 稱ルハ大ヲ用ヒ其餘ハ皆小ヲ用ヒタルヲ
 小稱

兩 今ノ三分三釐三毫三絲三忽不盡

銖 今ノ一分三釐八毫八絲八忽不盡

斤 今ノ五十三匁三分三釐三毫三絲三忽不盡

大稱

斤 今ノ五十三匁三分三釐三毫三絲三忽不盡

銖 今ノ四分一釐六毫六絲六忽不盡

兩 今ノ十匁

斤 今ノ百六十匁

〔元明天皇和銅六年四月十六日〕新格並ニ權衡度量ヲ

天下諸國ニ頒下ス續日本紀

〔按〕是時常用ノ權衡ヲ改テ大ヲ用フ故ニ之ヲ頑
 下スルナリ本朝度量權衡考ニ云和銅ノ時改テ
 藥ヲ合スルノ外大稱ヲ常用トセテレタリ延喜
 式ニ云フ所ノ斤兩即チ是ナリト而シテ天平元
 年兵衛ノ資物其絲綿ヲ言フニ皆小ヲ以テシ其
 十一年駄馬ノ法ヲ言フニ大ヲ以テス考言フ所

用ヒ十一年ノ駄馬ハ常用ノ大稱ヲ用ルナリ

〔聖武天皇天平元年四月十日〕諸國兵衛ノ資物ハ當郡

見在ノ郡司ヲシテ節級シテ之ヲ輸サシム云々上絲

小二斤庸綿小八斤ヲ以テ並ニ銀一兩ニ充テ即チ當

土ノ出ス所ニ依テ銀二十兩ニ准セシム

續日

〔按〕小二斤ハ六十兩零六六不盡今ノ百六分

不盡ト爲ス小八斤ハ六十四兩六六不盡今ノ

四百二十六分六分不盡ト爲ス此ヲ以テ銀一兩

ニ充テ二十兩ニ准シテ之ヲ輸サシム乃チ上絲

ハ二貫百三十三匁不盡庸綿ハ

八貫五百三十三匁不盡ナリ

〔十一年四月十四日〕天下諸國ヲシテ駄馬一匹貢フ所
ノ重サ大二百斤ヲ收テ百五十斤ヲ以テ限ト爲サシ
ム

續日
本紀

〔按〕大二百斤ト爲スハ二十四貫匁ナリ改テ

〔式〕凡ソ諸國ノ輸調絲ハ一丁ニ約ヲ成シ

鹿絲ハ七兩 疊綿ハ二帖細屯綿ハ二屯

各約ト爲ス 銀ハ一分鐵ハ二廷

綿ハ二屯 四兩ヲ屯 銀ハ一分鐵ハ二廷

云々 主計式○事調庸條中ニ具レリ

凡ソ諸國ノ輸庸上絲ハ二兩中絲ハ二兩二分鹿絲ハ

三兩二分並ニ丁ニ綿ハ五兩二分

主計式○事調庸條中ニ具レリ

〔按〕拾芥抄ニ云斤目大小有リ胡粉白鑄銅鐵絲綿
紅蘇芳ヲ大目ト爲シ金銀水精貴木香金青絲青
陶破ヲ小目ト爲スト蓋シ式ノ制ヲ承テ之ヲ言
フ而シテ銀ヲ小目中ニ置クハ當時ノ制ニ係ル
ノミ又云六銖ヲ一分ト爲シ十六兩ヲ一斤ト爲シ
十二兩ヲ一屯ト爲シ

駄ト爲ス自餘ノ雜物亦此ニ准ス其遠國ハ斟量シテ之ヲ減ス式雜

〔按〕五斗ハ今ノ三斗強ニシテ其重ヲ十二貫匁ト爲ス三俵ヲ駄ト爲セハ其重サ三十六貫匁ナリ然トモ是レ止マテ以テ其率ト爲スノム行路遠ノ處ハ斟量シテ之ヲ減ス乃チ駄率往々太々輕キカ如ク然ルモ有ル所所以ナリ又好古小録ニ云天平巳來古銅器ノ斤兩ヲ銷リタル者ヲ以テ考ルニ今ノ權衡斤兩異ナルコト無シト今應量器ナル者有リ所謂古銅器ナリ刻シテ重ト斤ト日フ其大ヲ言フ觀レハ令式ニ依ルコト審ナリ今ノ權衡ヲ以テ之ヲ稱ルニ八百匁ナリ大一斤ハ今ノ權衡ヲ以テ之ヲ稱ルニ八百匁ト爲ス是レ亦以テ古今稱ノ異ナラサルヲ八

大日本租稅志卷之五十九終

大日本租稅志卷之六十

大藏權少書記官正七位野中準等修

簿書式

〔按〕簿帳ノ起ルヤ尙シ今史傳ノ存スル所ニ據テ之ヲ考ルニ大化元年國司ニ詔シ戸籍ヲ作リ二年又戸籍計帳ヲ造ラシム姓錄ノ序ニ云天智天皇ノ儲宮タルヤ船史尺燼書ヲ奉進ス庚午ノ年ニ至リ戸籍ヲ編造ス人民ノ骨各其宜ヲ得タリ乃チ戸口ハ計帳ノ由テ本ク所ナリ而シテ養老ノ際ニ至リ諸牒漸ク備リ且其式有リ而シテ傳ハラス天平中諸簿今猶存スル者多シト雖モ率子斷簡ニシテ簿全ク見ルヘキモ爾來ナリ然トモ以テ當時簿ノ大槓ヲ知ルヘシ爾來ナリ色目益多ク延喜式ニ至テ最モ盛ナル其要且重キ事ヲ略レハ租稅帳計帳調帳ノ四種ニシテ政事要略其枝文ヲ載ス即チ租帳ニハ租交名帳品位田帳不堪坪付帳沒官田帳地子帳ト爲シ

税帳ニハ目錄帳公府處分帳文殊會帳神封租帳
 救急帳倉付帳燈分帳三實布施帳國分寺帳四度使
 帳修理國分寺料帳國分寺造物帳帳分寺雜帳
 帳神稅帳隱首帳雜色帳八日錄帳鄉戶帳浮浪人
 帳中男帳逃亡帳神戶帳多男帳高年帳老丁帳廢疾帳
 學疾帳遺喪帳禰宜祝帳老殘帳浮浪帳戶帳爲亡帳
 損田七分已上帳大帳後死帳仕丁資帳神戶調庸帳
 之ヲ枝文ト曰フハ本支相統屬又田田口帳而
 ルニ其目式文ト合ハサル者有リ又田田口帳而
 沽價帳實錄帳郷戶課丁帳及ヒ義倉官田正倉官
 會溝池桑漆ノ類亦各帳有リ其他枚舉ニ取ルニ
 期程有リ記注ニ様式有リ之ニ違ヘハ漏ヲ蒙リ
 詐レハ實ヲ受ク檢ノ法細大遺サス疎漏ヲ誠
 メ出入ヲ慎ミ以テ當日ノ勘會ニ供シ他年ノ證
 例ト爲スニ至テハ其控一ナリ今様式及ヒ處分
 併テ此ニ列舉ス

〔孝德天皇大化二年正月朔日詔〕初テ戶籍計帳班田收

授ノ法ヲ造ル云々日本書紀
 〔令〕凡ソ計帳ヲ造ル毎年六月卅日以前ニ京國ノ官司
 所部ノ手實ヲ責メ具ニ家口年紀ヲ注セヨ若シ全戶
 郷ニ在ラサレハ即チ舊籍ニ依テ轉寫シ並ニ不在ノ
 所由ヲ顯ハシ收メ訖レハ式ニ依テ帳ヲ造リ連署シ
 テ八月卅日以前ニ太政官ニ申送セヨ令戶
〔按〕手實ハ義解ニ云戸頭造ル所ノ帳其戶籍モ亦
 手實ヲ賣ムト唐六典ニ云凡ソ里ニ手實有リ
 終ニ民ノ年ト地ノ潤狹トヲ具シテ郷帳ヲ爲ル
 ト併セ考フヘキナリ式ニ依リ帳ヲ造ルハ義解
 ニ云計帳ヲ造ル摸樣ナリト蓋シ計帳ハ手實ヲ
 集メ以テ之ヲ大成スルモノナリ大帳大計帳亦
 同シ

凡ソ戶籍ハ六年ニ一タヒ造レ十一月上旬ニ起リ式

信ナリ時ヲ逐テ變更セハ詐偽必ス起ラン宜ク庚午ノ年ノ籍ヲ以テ定ト爲シ更ニ改易スルコト無ルヘ

シ本續日

〔按〕庚午ノ年ハ天智天皇九年ニ當リ大寶三年ニ先ツコト三十二年ト爲ス其籍法傳ハラスト雖モ當時其日ニ完備セルコト想フ可キナリ本史庚午ノ籍ヲ言フ一ニシテ足ラス餘ハ皆之ヲ略ス

〔元正天皇養老元年五月廿二日〕大計帳四季帳六年見

丁帳青苗簿輸租帳等ノ式ヲ以テ七道諸國ニ頒下ス

續日本紀 類聚國史

〔按〕四季帳ハ民部式ニ云凡ソ式部治部等入色ノ徒應ニ課役ヲ徵免スヘキ季帳ハ四孟月十六日各官ニ申スト是ナリ六年見丁帳ハ六年ニ一ト造ル所ノ籍ニ就テ單ニ見丁ヲ記スルモノナ

〔聖武天皇天平十年和泉監正稅帳〕

日根郡天平八年稅帳遺稻穀伍仟柒佰貳拾捌斛陸升捌勺陸撮

振定伍仟貳佰柒拾參斗貳升捌勺
不動貳仟參佰肆拾陸斛
動用貳仟捌佰陸拾壹斛參斗貳升捌勺
額稻壹萬參仟玖佰參拾參束壹把九分

出舉捌仟束
負死佰姓柒拾捌人 免稅壹仟捌佰壹拾束
未納壹仟陸佰肆拾陸束 負佰姓壹佰壹拾伍人
定納陸仟捌佰壹拾陸束 本四千五百卅四束 利二千二百七十二束

リ青苗簿ハ三代格是月十一日ノ勅ヲ載ス云自今以後國郡宜ク苗簿ヲ造ル日必ス其虛ヲ捨テ租帳ヲ造ル時全ク其實ヲ取ルヘシト唐六典ニ苗簿ハ種ル所ノ頃畝ヲ具シ七月以前官ニ申ス

東 酒壹斗
實計帳手實 正 將從參人 經參箇日 食稻參東玖把 酒
參升
檢校栗子 正 將從參人 經查箇日 食稻查東參把 酒壹
升
傳馬價宛 正 將從參人 經查箇日 食稻查東參把 酒壹
升
巡行部內教導百姓 正 令史 史生壹人 將從陸人 經肆
箇日 食稻壹拾貳束 酒壹斗壹升貳合
監月料宛 正 令史 史生壹人 將從陸人 貳度 經肆箇
日 食稻壹拾貳束 酒壹斗壹升貳合
徵納正稅 正 將從參人 貳度 經查拾箇日 食稻壹拾參
束 酒壹斗
封正倉 正 將從參人 經伍箇日 食稻陸束五把 酒伍
升
合酒糟柴斗貳合 修理池人夫單貳佰參拾肆人 人別三合
少領別君豐麻呂十一斛七斗四升四合三勺
主帳日根郡造五百足九斛七斗
欠酒參拾玖斛參升捌合 前佐丹比宿備足額可償未盡
合遺定稻穀伍仟肆佰伍拾玖斛陸斗陸升捌勺 未領
振定肆仟玖佰陸拾參斛參斗貳升捌合

不動貳仟參佰肆拾陸斛
動用貳仟陸佰壹拾柒斛參斗貳升捌合
願稻壹萬壹仟柒佰伍拾陸束把之五分
酒肆拾斛
盛厩捌口 口別受五斛
正倉壹拾肆間 不備三間 動用一間
屋貳字 空一宇
動不
南第貳丸木倉 長一丈二尺五寸 廣一丈一尺 高七尺 收納天平八年願稻柒佰陸拾肆束伍
把 大領外正七位上動十二等御使連乙麻呂
南第參丸木倉 長一丈九尺 廣一丈一尺 高九尺 收納天平八年願稻貳仟參佰肆束 出庫
下日帳外從八百足
南第肆板倉 長一丈三尺 廣一丈一尺 高七尺 空
西第壹丸木倉 長一丈二尺五寸 廣一丈一尺 高七尺 收納天平八年願稻貳佰柒拾陸束壹
把 大領外正七位上動十二等御使連乙麻呂
西第貳甲倉 長一丈七尺 廣一丈一尺 高七尺 收納天平八年願稻壹仟柒佰參拾捌束
大領外正七位上動十二等御使連乙麻呂
北第壹丸木倉 長一丈四尺 廣一丈一尺 高九尺 收納天平八年願稻貳仟貳佰壹束
北第貳丸木倉 長一丈四尺 廣一丈一尺 高九尺 收納天平八年願稻貳仟貳佰壹束

正税帳... 封戸租交易帳... 因ノ之ヲ略シ其一ニヲ採録シ以テ當時簿式ノ一斑ヲ示ス次條亦併セ看ルヘシ

〔十二年遠江國輪租帳〕

漢名郡 依式造天平十二年輪租帳事

合郡内管田惣壹仟捌拾陸町壹段壹佰肆拾伍步... 貳佰貳拾柒町肆段柒拾壹步不堪佃荒... 壹佰貳拾柒町肆段柒拾壹步口分... 捌拾參町柒段壹佰參拾伍步墾田... 伍町陸段壹佰參拾參步不墾租... 肆段放生田... 陸段公麻田... 參町肆段田... 壹町陸段壹佰參拾參步入田... 柴伍拾玖町肆段貳佰壹拾陸步應輸租... 陸町郡可職田... 玖拾參町陸段捌拾伍步應輸地子

陸町關郡可職田

壹町射田

合受田戸柴伍拾伍拾伍步乘田

口伍仟參佰柒拾壹人伍佰貳拾伍戸神戸壹佰壹拾戸封

壹佰捌拾柒戸損五分以上

參佰陸拾柒戸損四分以下

合應輸租壹萬壹仟參佰玖拾壹束玖把

貳佰參拾參町陸段貳佰肆拾步損五分以上見不輸肆拾柒町捌段神戸

壹佰貳拾柒町肆段柒拾壹步損

肆佰壹拾町捌段損四分以下半輸柒拾參町貳段神戸捌拾町

壹佰貳拾柒町肆段貳佰壹拾陸步損貳拾伍町貳段神戸捌拾町

貳佰捌拾陸町壹段壹佰肆拾肆步得伍拾町貳段神戸捌拾町

壹佰壹拾肆町玖段參佰參拾陸步全得貳拾陸町貳段神戸捌拾町

新居郷官戸壹佰壹拾

口陸佰柒拾柒人伍拾陸戸男貳人女貳人

大日本... 卷之六十一

參拾壹戶損五分以上
伍拾參戶損四分以上

見管田玖拾柒町貳佰伍拾參步口分

參拾柒町肆段貳佰肆拾步損五分以上見不輸
貳拾町參段貳佰陸拾步

伍拾參町損四分以下半輸
陸町陸段壹拾參步全得

(中略)

津樂鄉 戶參拾捌
口貳佰陸拾捌人

玖戶損五分以上
壹拾肆戶損四分以下

見管田參拾捌町參段貳佰玖拾玖步口分

壹拾伍町損五分以上見不輸
壹拾貳町肆段貳佰肆拾步

壹拾貳町玖段貳佰玖拾玖步全得

戶主山部乎伎戶山部首木田壹町陸段貳佰陸拾步

戶主山部忍人戶山部若賣田伍段壹佰貳拾步

戶主山部得麻呂戶日下部真鳥田捌段 肆段貳佰陸拾步
 戶主敢石部百麻呂戶敢石部守知田玖段壹佰貳拾步
 戶主伊福部乎麻呂田壹町伍段壹佰貳拾步
 戶主伊福部古都彌田壹町貳段陸段貳佰陸拾步
 戶主日下部布彌田壹町貳段肆段壹佰貳拾步
 戶主山部羊戶三使部酒麻呂田玖段壹佰貳拾步
 戶主山部得麻呂田玖段壹佰貳拾步
 戶主敢石部百麻呂田壹町肆段貳佰陸拾步
 戶主山部少根田壹町肆段伍段貳佰壹拾陸步
 戶主山部伯勢田壹町壹段壹佰貳拾步
 戶主神人部稻村田貳町壹段壹佰貳拾步
 戶主神人部百島戶神人部木麻呂田壹町貳段
 戶主小長谷部奈為田肆段貳佰肆拾步
 戶主神人部色乎田壹町壹段壹佰貳拾步
 戶主師部小具木田捌段壹段貳佰壹拾陸步
 戶主日下部布彌戶日下部足島田玖段壹佰貳拾步
 戶主大湯坐部牧夫田壹町壹段壹佰貳拾步
 戶主白髮部得麻呂田壹町貳段貳佰貳拾步

謹件 天平十二年 輸租夾名具注 如件 仍附貢調使介
 正六位上 大伴宿禰名負申上以解
 天平十二年十一月廿日正六位下行大目美原忌寸 廣根

從五位下守守勳八等百濟王大御賢使 正六位上行大掾勳十二等掃守宿禰朝事使
正六位上行介勳十二等大伴宿禰名賀從七位下行少目我孫君嶋道

正倉院文書

〔平城天皇大同三年八月六日〕諸國ヲシテ徭帳ヲ進メ
シム諸國ノ雜徭差役各殊ナルカ爲ナリ日本後紀 額聚國史
〔嵯峨天皇弘仁十一年十二月廿六日太政官符〕民部省
ノ解ニ曰ク格ニ云ク天平十四年勝寶七歲寶龜四年
延曆五年ノ四度ノ圖籍ハ皆證驗ト爲セ公式令ニ云
ク文案詔勅及ヒ婚田市沽等ノ案此ノ如キノ類ハ常
ニ留メヨ以外ハ年別ニ檢簡シ三年ニ一タヒ除ケ具
ニ事目ヲ錄シ記ヲ爲レ其年限ヲ爲スヘキハ事ヲ量
テ留メ納メヨ限滿タハ准シテ除ケト今諸國ノ田籍

ヲ檢スルニ偏ニ戸頭ノ姓名口分ノ町段ヲ注シ一班
ノ後必シモ相同シカラス但圖ハ公私ニ用有リ永ク
存シテ見ルヘシ望請フ内外ノ田圖ハ悉ク置テ比技
ニ擬シ備ヘ畿内ノ田籍ハ證年ヲ除クノ外一班ヲ經
ル毎ニ例ト爲シテ除弁セン其庫内先ニ墾田ノ籍有
ラハ亦簡留ニ從ハン又七道ノ諸國籍ヲ進テ圖ヲ進
メサルモノ有リ自今以後諸國ニ下知シ籍ヲ停テ圖
ヲ進メシメント勅ス請ニ依レ額聚三代格 政事要略
〔按〕職原抄ニ云民部省ハ周禮地官大司徒ノ職ナ
リ邦國土地ノ圖戶口人民ノ數此官ノ知ル所ナ
リ本朝又此ノ如シ天下ノ戶口皆之ヲ掌ル又國
帳有リ國郡ノ勝示載テ以テ明白ナリ之ヲ民部
省ノ圖帳ト謂フト蓋シ田籍ハ以テ班田
ノ爲ニシテ亦以テ檢租ノ根基ト爲スナリ

假令以下數句
文章明ナラス
悉クハ厥有シ

〔仁明天皇承和九年六月九日太政官符〕案内ヲ檢スル
ニ太政官去シ弘仁十年五月十六日五畿内七道諸國
ニ下ス符ニ曰ク靈龜三年五月十一日ノ勅書云ク
自今以後宜ク苗簿ヲ造ルヘシ養老元年八月十日ノ
格ニ云ク自今以後租ヲ納ルノ事ハ青苗簿ニ依リ手
實ヲ進メヨト今按スルニ租ヲ勘スルノ道ハ先ツ苗
簿ニ由ル苗簿ノ興ル年紀既ニ久シ而ルニ今諸國彼
簿ヲ造ラス田租ヲ勘スルニ至テ事疎漏多シ假令ハ
甲ノ戸田ヲ乙ニ沽與ス乙ノ戸田己ニ損シ自ラ調ヲ
免ルヲ得甲ノ直ヲ得ル甲ニ於テ損無シ苗簿ノ意ハ
甲ヲシテ調ヲ輸サシメントシテ今損ヲ勘スルノ日

苗簿無キニ依リ偏ニ戸主ヲ稱シ甲ノ調ヲ徵セス凡
ソ此レ苗簿ヲ作ラスシテ致ス所ノ弊ナリ唯怠ヲ爲
スノミニ非ス還タ官物ヲ失ハン宜ス作ラサルノ怠
理須ラク科附スヘシ宜ク諸國ニ仰セ勸テ勸作セシ
ムヘシ若シ使至テ帳無キ者有ラハ罪ヲ科シ考ヲ貶
ス一ニ法律ニ任セヨト今宣ス凡ソ厥苗簿ノ起ルハ
國郡ノ清濁ヲ激揚シ田畝ノ損得ヲ沙汰スル所以ナ
リ聞カ如キハ或ハ田籍ヲ詐寫シ或ハ損シテ而シテ
存セス是ヲ以テ朝使檢校ノ日既ニ實ニ乖クノ計多
ク官物收納ノ時還テ充倉ノ實少シ此レ祗ニ國宰怠
慢ノ致ス所ナリ宜ク諸道ニ下知シ様ニ據テ造リ備

へ大帳使ニ附シテ必ス官ニ進メシムヘシ若シ進メサル者ハ損ヲ申スヲ聽ルサス但太宰管内ノ諸國ハ便チ彼府ニ進メ府使檢校シテ疎漏ヲ得サレ類聚三代格政

〔按〕十二年ニ至リ相摸國損有ルノ年ハ勘會ニ用有ルヲ以テ商簿ヲ進メ損無キノ年ハ其用無キニ因リ進メテラシコトヲ請ヒ官之ヲ許シ且諸國ヲシテ此ニ准セシメリ弘仁十年五月ノ符書見ル所無シ蓋シ逸文ナリ

〔九月廿二日〕右大臣宣ス民部省毎年五月七日勘申スル所諸國ノ大未進帳小未進帳ハ著シク國司ノ功過ヲ見ル褒貶スヘキニ至テ證驗ト爲スニ堪ヘタリ宜ク辨官ヲシテ外記ニ入レシムヘシト立テ、永例ト

爲ス類聚符宜抄

〔按〕未進ハ田租調庸等ノ未納ナリ

〔清和天皇貞觀四年六月五日〕太政官處分ス諸國ノ校田帳自今以後大帳ニ准據シ損減ヲ許サス若シ損スル所有ラハ例返帳ト爲セ但非常ノ損ハ別錄シテ言上セシム三代實錄

〔醍醐天皇延喜十四年八月八日太政官符〕厨家ノ解ニ日々諸國ノ地子帳其例各異ナリ未タ定法有ラス或ハ田品ヲ注セス上下辨シ難ク或ハ交易ノ直貫賤定ル无シ此外逕庭類ニ觸テ數有リ望請フ處分セフレ式例ニ依テ特ニ造進セシメ即チ立テ、恒例ト爲ン

ト勅ス請ニ依レ政事要畧

〔式〕凡ソ諸國ノ四度ノ公文官ニ進ルノ日ハ目錄ヲ比

按ス若シ未タ到ラサルノ公文有レハ即チ返却ニ從

フ太政官式

〔按〕政事要畧ニ云總帳ヲ以テ四度公文ト稱ス頗ル共意ヲ得ルニ似タリ或ハ云主計四度ノ公文ハ大帳調帳朝集帳義倉帳ナリ主計四度ノ公文ハ稅帳租帳出舉帳朝集帳ナリ先說ハ總帳ヲ以テ四度公文ト爲シ後說ハ枝帳ヲ相分チ四度公文ト爲ス未タ其意ヲ得ス故ニ之ヲ兩存ス又其注ニ云但朝集公文ハ二案ヲ相分ツナリ公文ニ就キ熟看セハ尋知スヘシト四度使ノ事ハ中ニ就キ熟看セハ尋知スヘシト四篇ニ見エタリ

凡ソ諸國ノ調庸等ノ帳官ニ進ルトキハ即チ太政官

數國ヲ總計シ目ヲ造リ少納言之ヲ奏ス太政官式

凡ソ諸國ノ大帳朝集稅帳ノ公文官ニ進ルノ後外題

シテ文殿使並ニ雜掌ニ下シ二个月ヲ經テ參書セサ

レハ直ニ所司ニ下ス太政官式

〔按〕政事要畧ニ云私ニ問フ大帳ト號スルハ所見有リヤ答テ云公式ニ云事ヲ受ルニ一日交ケハ二日ニ付ケ畢ヘヨ大事ハ廿日程ト注ニ云大簿帳ヲ計算スルヲ謂フ義解ニ云大帳稅帳等ヲ勘スルヲ謂フナリ大帳簿帳ノ義取リ文ヲ略リヤ答フ所見無シ但朝集帳相通帳又各情有數有リ主計ノ桑漆帳舖設帳主稅ノ官舍帳池溝帳麥畠帳ノ類總テ之ヲ朝集帳ト號ス今此式人帳稅帳共ニ帳字有リ朝集帳字ヲ注ス朝集ハ總名スルニ依リ帳字ヲ別チ各物ヲ注ス朝集ハ總名タルニ依リ帳字ヲ加ヘサルカ主稅察省ニ進ル朝集勘了ノ解狀ニ云朝集公文ヲ勘了スル事以前某國某年ノ朝集公文例ニ依リ勘了スル事以前件ノ如シ又是レ帳字ヲ注セル所ナリ朝集ト稱ス凡ソ官物ノ類ハ朝集ノ重スル所ナリ總テ其物ヲ

職ス仍テ朝集ト號スルカ調帳ハ名ヲ以テ知ル
ヘヤノミト以テ參觀スヘシ本文ノ意官公文ニ
外題シテ文殿使等ニ下シ二个月ヲ經テ國史參
著セサレハ直ニ主務ノ司ニ下スヲ謂フナリ

凡ソ大帳調庸正統ノ損益ハ總目ヲ勘抄シ大帳稅帳
ハ明年正月調帳ハ七月並ニ省ニ申ス省即チ押署シ
テ官ニ申ス自餘ノ損益此ニ

凡ソ朝集使事ヲ終テ國ニ還ル者ハ二寮ヲシテ官舍
溝池桑漆種麥陸田鷄鋪設等ノ帳ヲ勘合セシメ然ル
後式部省ニ移送ス式民部

凡ソ太宰府管内ノ諸國島ノ大帳調帳稅帳ハ府ノ雜
掌ヲシテ勘申セシム但筑前筑後豐前豐後肥前肥後
等ノ國ハ當國ノ雜掌ヲ副テ各勘辨ヲ得セシム式民部

〔錄白〕令義解ニ
録ルニ直ニ白
紙ニ於テ之ヲ
録シ朱印ヲ點

〔按〕是ヨリ先々元慶五年日向國守安倍弘行解ヲ
上テ管內ノ政先ツ府ニ申シ府更ニ解ヲ修テ官
ニ申スハ煩ト爲スヲ以テ筑後肥前豐後等ノ例
ニ准シ直ニ押署ヲ取リ國司ヲ差シテ言上セシ
コトヲ請ヒ八年大隅國守時統當世解ヲ上テ請
掌ヲシテ正稅返却帳ヲ勘辨セシメシトナリ
ヒ並ニ之ヲ允サル又寛平九年太政官符ヲ以テ
太宰府ハ應ニ先ツ當任ノ公文ヲ勘シ次ニ府
ノ時ノ帳ヲ勘シ並ニ四度ノ公文ヲ勘セサル府
司及ヒ管內ノ國島司ノ科實スヘキノ旨ヲ令セ
リ其他太宰府ニ於ケルノ處分少シトセス蓋
シ府及ヒ其管內ハ他國ニ異ナルヲ以テナリ
凡ソ應ニ籍ヲ造ルヘキハ預前一年ニ省錄シテ官ニ
申シ報ヲ待テ施行ス職國官司例ニ依テ勘造ス其諸
國ハ貢調使ニ附ス太宰ハ貢綿使ニ附シテ申送ス檢
領訖テ即チ錄白返抄ス式民部
凡ソ籍書ハ國家ノ重案ナリ其須ル所ノ紙ハ黃牒ニ

染メ必ス須ラク堅厚ナルヘシ法ノ如クナラサルコ
ト有ラハ隨テ即チ勘却ス但西海道ノ諸國ハ白紙ニ
書ス式民部

凡ソ諸國ノ品位田ノ帳ハ稅帳使ニ附シテ毎年之ヲ
進ム式民部

凡ソ諸國ノ拔田授口等ノ帳ハ省ニ下スノ日前ノ班
田帳ニ比按ス若シ乘田ノ數減省有ラハ不課分ヲ折
テ本數ニ滿タシム式民部

凡ソ拔田帳ハ前帳ニ比按ス若シ損有ラハ其帳ヲ返
ス式民部

凡ソ諸國ノ拔田授口帳ヲ勘スルノ日若シ大帳ト授

口帳ト男數等カラサル者ハ宜ク其帳ヲ返スヘシ但
女人ハ縦ヒ授口帳ノ數少シト雖モ例ニ依テ之ヲ勘
ス式民部

凡ソ諸國ノ班田ノ簿帳目錄ハ官ニ進メ外題シテ省
ニ下ス省色數ニ依テ勘會シ訖テ即チ錄白返抄ス式民部

凡ソ正稅帳ヲ進ル者皆二月卅日以前ヲ限リ並ニ官
ニ申送ス但西海道諸國並ニ島ハ二月卅日以前ニ太
宰府ニ送ル府以テ覆勘ヲ加ヘ五月卅日以前ニ官ニ
申ス式民部

〔按〕政事要略大帳調帳稅帳官ニ申スノ期限ヲ觀
ス乃チ大帳ハ與羽二國ハ次條ニ同ク志摩佐渡

太宰ハ五月卅日以前畿内ハ十月一日七道ハ十
 一月一日ト爲ス調帳ハ畿内及ヒ伊賀伊勢志摩
 尾張參河近江美濃若狹丹波丹後但馬因幡播磨
 美作備前紀伊淡路ハ十月遠江伊豆駿河甲斐飛
 騨信濃越前加賀能登越中伯耆出雲備中備後阿
 波讚岐ハ十一月相摸武藏上總下總安房常陸上
 野下野陸奥出羽石見安藝周防長門ハ十二月伊
 豫ハ二月其字和喜多ノ二郡ハ三月土佐ハ二月
 越後佐渡隱岐ハ七月ト爲ス稅帳ハ諸國ハ二月
 卅日以前飛騨信濃上野陸奥能登越中越後ハ四
 月出羽太宰ハ五月ト爲ス而シテ調帳ノ
 期ヲ參期ト曰フ附記シ以テ參考ニ供ス
 凡ソ計帳ハ陸奥出羽ノ兩國太宰府ハ九月卅日以前
 ニ申送ス餘國ハ令ノ如シ民部
〔按〕賦役令ニ云凡ソ毎年八月卅日以前ニ計帳至
ラハ民部ニ附スト令ノ如シトハ即チ之ヲ謂フ
 凡ソ諸國ノ大帳正稅帳ノ損益ハ主計主稅勘定シ畢

テ即チ返抄ヲ給フヘキノ狀ヲ省ニ申ス省解ヲ修メ
 官ニ進ム但調帳ハ收物ノ訖ルヲ待テ乃チ送ル民部
 凡ソ諸國ノ大帳朝集稅帳ノ公文ハ官ヨリ下スノ後
 使並ニ雜掌無キニ依テ勘會スルヲ得ヌ遲怠シテ期
 ニ違フニ及フトキハ具ニ其由ヲ錄シ結解帳ニ載テ
 官ニ申ス民部
 凡ソ京職諸國ノ大帳ハ班田ノ年ニ至ル毎ニ五歲已
 下ノ男女ハ顯ニ年紀ヲ注ス民部
 凡ソ義倉及ヒ官田地子等ノ帳ハ並ニ正稅帳使ニ附
 ス義倉帳ハ主計ニ附シ出舉帳郷戶課丁帳ハ並ニ大
 官田帳ハ主稅ニ附シ出舉帳ハ省ニ留メ大帳ハ主
 田租帳
 帳使ニ附ス計ニ附シ出舉帳ハ省ニ留メ大帳ハ主
 田租帳

ハ貢調使ニ附ス但明年貢調スル國正倉官舍溝池桑漆等ノ帳ハ竝ニ朝集使ニ附ス式民部

〔按〕是ヨリ先ヤ弘仁六年諸國ノ正稅帳計帳ノ兩使ハ朝集使ニ附セシメ十三年太宰府算師ヲ差シテ稅帳使ニ充テ計帳公文ヲ附セシメ承和十一年陸奧國ノ計帳公文ハ朝集使ニ附シ正稅帳使ハ專使ヲ差シテ進上スルコトヲ允サル其他公文使ノ事諸書ニ散見ス皆之ヲ略ス

凡ソ諸國ノ例進圖籍戶籍並ニ郷戶課丁位田等ノ帳若シ未進有ラハ庸並ニ稅帳ノ返抄ヲ拘留ス式民部

凡ソ諸國ノ地子帳ハ三通ヲ造リ一通ハ主稅寮一通ハ主計寮一通ハ官厨ニ送ル具ニ田ノ上中下及ヒ損益ヲ錄シ正稅帳使ニ附シテ申送ス若シ去年ノ勘出物ヲ填セサル者ハ稅帳ノ返抄ヲ拘留ス神稅帳ハ二

〔官厨〕太政官ノ厨家ナリ

通ヲ造リ一通ハ神祇官ニ送リ一通ハ省ニ送ル式民部

凡ソ雜公文ノ結解ハ正稅帳大帳出舉帳ハ明年正月一日田租帳ハ四月一日調庸帳ハ七月一日ニ主計主稅並ニ省ニ申送シ即チ同月上旬ニ官ニ申ス但出舉帳ハ省ニ留ム式民部

凡ソ諸國ノ大未進小未進等ノ帳ハ國司ノ功過ヲ勘錄シテ毎年正月五日以前ニ官ニ進ム式民部

凡ソ大帳ヲ勘スルハ皆去年ノ帳ニ據テ其出入ヲ勘ス但死亡篤廢殘疾服侍隱首括出并ニ中男郷戶課丁等ノ色ハ別簿ニ計會シ其符ニ依テ課ニ入ルモノ及ヒ雜色等ノ類ハ省ノ符ニ勘合ス若シ符ニ違テ過免

シ并ニ進ム可クシテ進メサルハ並ニ即チ勘出シテ
其課役ヲ徵ス次ニ去年ノ大帳ノ後死帳ト今年ノ死
亡帳トニ計會ス若シ名後死帳ニ在テ死亡帳ニ載セ
サルハ亦之ヲ勘出ス次ニ神寺諸家ノ封戸并ニ應ニ
定納スヘキ官人ノ數及ヒ賦物ヲ勘ス即チ損益總目
ヲ勘抄シテ明年正月一日ニ省ニ申ス訖テ應ニ返抄
ヲ給フヘキノ狀ヲ勘造シ主稅寮ニ送り即チ出舉帳
ヲ勘スルノ狀ハ便ニ主計ノ狀尾ニ錄シ官人署名シ
テ返送シ訖テ即チ省ニ申ス其符ニ依テ免スル所ヲ
符損ト爲シ符ニ依テ進ル所ヲ符益ト爲ス議ニ依テ
免スル所ヲ議損ト爲シ議ニ依テ進ル所ヲ議益ト爲

ス例ニ依テ損スル所ハ以テ例損ト爲シ例ニ依テ進
ル所ハ以テ例益ト爲ス主計式
凡ソ大帳ノ損益ヲ勘スルハ皆須ラク損進ヲ相折シ
テ其損益ヲ檢スヘシ若シ損進同數ニシテ増益スル
所無キハ即チ官省ニ申シ其帳ヲ返却ス但數年ノ有
益無損ヲ通計スルハ之ヲ聽ルス主計式
凡ソ諸國ノ大帳課丁ノ數ニ損有ラハ隨テ即チ返帳
ス若シ使等填スヘキノ狀ヲ官ニ申シ外題ヲ下スヲ
被ラハ返抄ニ注載シテ後年ニ填セシム主計式
凡ソ調庸帳ヲ勘スルハ皆大帳ノ人數ニ據ル若シ大
帳ノ後更ニ出入有ラハ實ニ依テ之ヲ勘ス即チ神寺

大田本組院志 卷之六 大田本組院志

諸家ノ封戸ヲ除キ應ニ定納スヘキ官物ニ據テ即チ
損益帳ニ通ヲ造ル一通ハ寮ニ留メ一通ハ國ニ下ス○主計式

凡ソ太宰ノ管内筑前筑後肥前肥後豊前豊後等六箇
國ノ大帳調帳ハ稅帳ニ准シ當國ノ雜掌ヲシテ勘申

セシム即チ雜掌ニ附シテ大帳ノ返抄并ニ調帳ノ損
益等ヲ收ム朝集帳及ヒ自餘ノ國島四度ノ公文ハ府

ノ雜掌ヲシテ之ヲ勘セシム主計式

凡ソ諸國申ス所ノ疫死并ニ流死ノ者ハ先ツ其數ヲ
計ヘ平年ノ死ニ准シ流疫ニ死ノ丁ヲ割キ例損ノ數

ヲ加ヘ相折シテ損進ス主計式
凡ソ調帳ノ損益帳ハ先ツ貢調使ヲシテ調庸ノ雜物

十分ノ九ヲ進納セシム然ル後主稅寮ノ租帳ヲ勘レ
畢ルノ移ヲ待チ署印シテ國ニ下シ以テ憑准ト爲ス

二通ヲ造リ一通ハ寮ニ留ム○主計式

凡ソ京職ノ調條錢ノ用度帳ハ官ヨリ下スヲ待テ勘
會シ已ニ訖ヲ乃チ返抄ヲ申ス主計式

凡ソ桑漆帳ハ戸數ニ率ヒ關有ラハ其帳ヲ殖填セシ
ム主計式

凡ソ大帳ハ六年ニ一タヒ除ク調庸死亡條囚隱首季
帳及ヒ諸司返上等ノ帳ハ三年ニ一タヒ除ク雜任帳

ハ一年ニ一タヒ除ク主計式

〔按〕除トハ帳簿ノ要不要ヲ甄別シ年數ヲ定テ之ヲ棄捐スルナリ

凡ソ公文ヲ勘スル附入ノ物ハ多數ヲ得除免ノ物ハ少數ニ從フ並ニ此例ニ據テ雜簿ヲ勘申ス式主計

凡ソ京畿内諸道總テ七十國人物ノ總數ハ勅有ルニ非ルヨリハ輒ク勘申セス但十國已下ハ官宣一依テ

之ヲ勘ス式主計

其國司解申預計某年大帳事

合管郡若若干去年若干

戶若干不課欠乘去年若干

戶若若干八位已上

戶若若干舍人此更各有爲給一色項

戶若若干使部此更各有爲給一色項

戶若若干老疾

戶若若干小

戶若若干課欠乘去年若干

戶若若干不合差科

戶若若干丁此更各有爲給一色項

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

戶若若干去年若干

ヲ省ニ送ル若シ當年ノ勘出物大國ハ一萬束上國ハ
 八千束中國ハ六千束下國ハ四千束ニ滿レハ即チ返
 帳ス但損益帳一通ヲ造テ寮ニ留ム仍ホ返由ヲ録シ
 テ省ニ申ス某ノ未納并ニ交替ノ關及ヒ去年ノ勘出
 物ノ未タ填セサルハ束把ヲ見ルト雖モ亦猶返帳ス
 唯當年ノ勘出差數ニ滿タサレハ即チ顯ニ勘出シテ
 返帳スヘカラス主稅式

凡ソ租帳ヲ勘スルハ皆當年ノ帳ニ據テ即チ國內ヲ
 通計シ十分ニ七分已上ヲ得ルヲ以テ定ト爲ス若シ
 不堪佃有ラハ十分ノ一ヲ除クヲ聽ルス如シ此限ヲ
 過キハ各官ニ申シ裁ヲ聽ク主稅式

凡ソ諸國ノ稅帳返却帳ハ多年ノ帳一度ニ下スト雖
 モ而モ毎年造申シ一卷ニ總造スルコトヲ得主稅式

凡ソ租稅ノ損益帳ハ堅厚ノ熟紙ヲ以テ之ヲ書ス即
 チ其縫ニ皆某國某年某帳ノ損益帳ト注ス主稅式

凡ソ正稅倉附帳租目錄帳同損益帳ハ三年ニ一タヒ
 除ク官舍并ニ池溝帳ハ十年ニ一タヒ除ク主稅式

凡ソ諸國ノ稅帳ニ別納租穀并ニ租春料及ヒ例交易
 雜物ノ直ヲ立用セサルハ其帳ヲ返却ス主稅式

凡ソ諸國ノ租帳ニ過分ノ損并ニ過分ノ不堪佃田ヲ
 注スルハ返帳シテ改正セシメ然ル後之ヲ勘ス主稅式

某國司解申收納某年正稅帳事
 管郡若干

某	見	買	地	派
賣	租	田	子	人
口	田	每	乘	口
戶	分	里	田	姓
主	若	某	若	每
姓	干	里	干	里
名	干	分	干	分
戶	名	田	田	田
田	姓	若	可	若
若	干	干	錄	干
干	干	干	品	干
干	干	干	可	干
干	干	干	注	干

某	以	某	右	某
國	前	國	得	國
司	具	司	管	司
解	狀	解	地	解
申	如	申	子	申
年	左	年	田	年
月	仍	月	若	月
日	附	日	干	日
不	大	不	干	不
堪	帳	堪	干	堪
佃	使	佃	干	佃
田	官	田	干	田
事	位	事	干	事
	姓		干	
	名		干	
	言		干	
	上		干	
	如		干	
	件		干	
	體		干	
	解		干	

大田本租稅志 卷之六 三十五 大田本租稅志

合國內田若干
 不輸租地子田若干
 定田若干
 不堪佃田若干
 租田若干
 地子田若干
 堪佃田若干
 見損田若干
 得田若干
 租田若干
 地子田若干
 八分已上戸若干
 七分已上戸若干
 五分已上戸若干
 四分已下戸若干
 右得管諸郡司解備云云者國司巡檢所申有實以注損
 得田申上如件謹解

主稅式

授田ノ口帳ヲ勘造スル書生四百二人紙三千八百張
 墨四挺筆五十管

右班田ノ年ニ當リ件ノ帳ヲ勘造ス其紙筆等ノ
 價ハ係錢ヲ用フ食法ハ上ニ同シ唯功ヲ給セス
 左右
 京式

田籍ハ三通ヲ造ル其帙ノ料ハ小町席二枚縁ノ料ハ
 黄帛三丈八尺黄絲一兩三分半標紙ノ料ハ厚紙五十
 三張緒ノ料ノ韋ハ一張軸ノ料ハ檜樽一材巳ト官ニ
申シ請ヒ
 ノ軸ヲ作ル工二人帙ヲ縫フ女五人ノ功食ハ並ニ係
 錢ヲ以テ充ツ左右
京式
 戸籍帙ノ料ハ小町席黄帛黄絲洗鹿革盛ル韓橫裝潢

手書手ノ功食ハ並ニ官ニ申シ請ヒ用フ其紙筆墨ハ
並ニ令條ニ准ス但紙ハ戸口ノ數ニ隨フ十五人三計
帳ヲ進メサル戸料ノ紙筆墨ハ亦官ニ申ス紙一千張
ニ墨一挺ヲ充ツ一百五十張ニ筆一管ヲ充ツ左右
凡ソ計帳ノ手實ヲ賣ルハ進屬各一人ヲ別當ト爲ス
史生二人ヲ預ト爲ス但書生ハ條別ニ二人ヲ充ツ六
月一日ニ起リ九月卅日ニ盡ク賣訖テ大帳ハ十月卅
日以前ニ之ヲ進ム其書生ノ食ハ三箇月ヲ限テ之ヲ
給フ左右
凡ソ計帳ヲ進メサル者ハ職交名及ヒ口分田ノ數ヲ
錄シテ官ニ進メ即チ畿内諸國ニ下ス其料物並ニ書

生ヲ雇フ功食ハ毎年官ニ申シ請ヒ用フ左右
凡ソ職寫田帳ハ十二月十日以前ニ之ヲ進ム同月ノ
内ニ諸國ニ下ス其沽田帳ハ直錢ヲ副テ明年五月卅
日不沽田ノ地子帳ハ十一月卅日以前ニ之ヲ進ム絶
戸田モ此ニ准ス左右
凡ソ職寫不沽田ノ例損ハ不沽帳ノ田數ニ率テ一分
不堪三分損ヲ除クノ外全ク地子ヲ收ム其收ル所ノ
稻數ハ帳ニ載テ官ニ進ム但有損ノ年ハ當國損ヲ申
シ官ノ勘定ニ依テ職亦徵免ス左右
凡ソ調徭錢用帳ハ毎年正月一日ニ起リ六月卅日ニ
盡キ七月一日ニ起リ十二月卅日ニ盡ク二度之ヲ進

ム 左右
京式

凡ソ義倉ノ用度帳ハ毎年三月ニ之ヲ進ム左右京式

凡ソ毎月沽價帳三通ヲ勘造シ職ニ送ル職押著シテ

即チ職印ヲ以テ之ニ印ス一通ハ官ニ進メ一通ハ職

ニ留メ一通ハ司ニ付ス東西市式

凡ソ市人ノ籍帳ハ毎年ニ造リ進ム東西市式

〔一條天皇永延三年十月廿三日〕尾張國雜掌尾張成安

去シ延永元年七月十日ノ解狀ニ日ク謹テ案内ヲ檢

スルニ授口帳ハ合期勘造シ官ニ進メ先ツ了ル方今

官省ニ外題ヲ請ヒ公文ヲ勘濟セント擬スルノ間主

稅察勘返シテ云ク班符未タ下ラサル國ノ租帳ハ宜

旨ヲ業ルニ非レハ輒ク勘濟ニ堪ヘス雜掌徒ニ公文

ヲ把リ寮底ニ辛苦ス望請フ班符未タ下ラサルノ間

勘出ヲ置キ永觀元寛和元ニ永延元併テ四箇年ノ租

帳ヲ勘濟シ事ノ煩ヲ省カント宣ス請ニ依レ政事要略

大日本租稅志卷之六十終

大田...
卷之六十一
三十九
大田...

正誤

第五十九卷

第十一張左第十一行

〔記〕〔紀〕ノ誤

第六十卷

第三十一張右第十八行

〔石〕〔口〕ノ誤

大日本

正

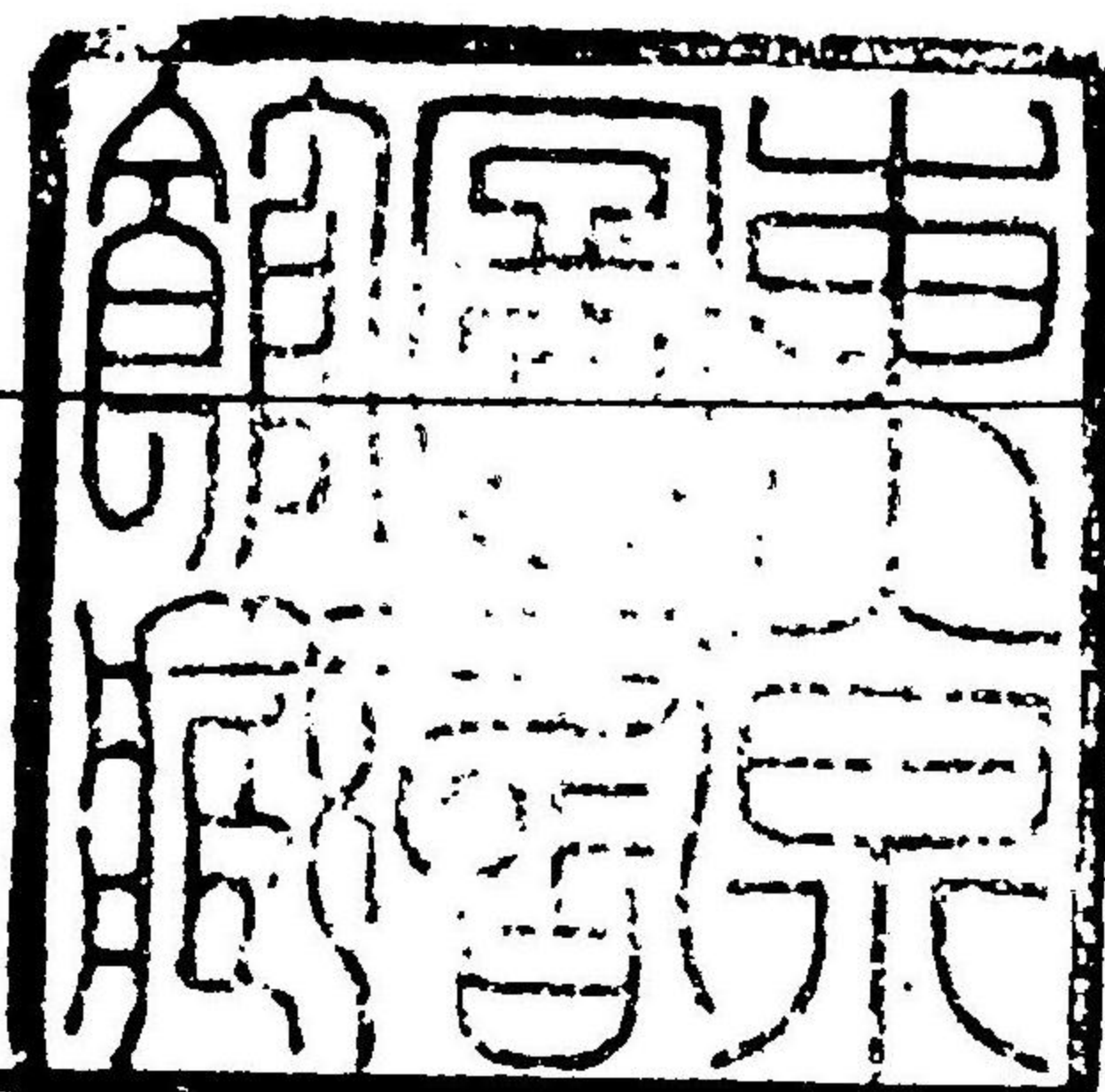
九

十

大日本租稅志

二十八

東 京 國 志				
類	屬	函	架	号



大日本租稅志卷之六十一

大藏權少書記官正七位野中準等修

雜篇第二

自慶和
至應和

園穀

〔按録倉室町ノ時貯穀ノ制得テ徵スヘキヨ
 シ是レ海内寧日鮮ク其法ヲ講スルニ違フサ
 レハナリ豐臣氏ニ至リ其舉有リト雖モ以テ兵
 事ノ用ニ備ルニ過サルノ其額ニ德川氏百勸ヲ
 スルニ及テ諸國米ノ定額有リ又下民勸ヲ理
 米穀ニ粟ヲ貯ヘシメ額二十分ノ一ヲ付ス
 又侯伯ヲシテ高シメ額二石ニ俵ヲ貯ヘシテ
 五拾石ト爲シ終ニ百石ト爲テ要スルニ皆豊
 ニハ蓄積シ凶年ニハ散出シテ以テ窮民ヲ賑
 スルナリ而シテ年ニハ其額ヲ簿面ニ録スル
 ニシテ實行セラル間マ其額ヲ因テ嚴ニ其弊ヲ
 正シテ令達頻繁枚舉ス可ラズ今其要略ヲ其弊
 ヲ矯ス



大日本租稅志 卷之六十一 大藏省

凡ソ貯穀ハ國家ノ重典ニシテ曩昔不動倉等ノ
 遺意ニ遵フナリ然トモ貯藏其度ニ過レハ或ハ
 地方ノ米價ニ昂低ヲ生シ民人窮苦シテ却テ豐
 穰ヲ喜ハサルニ至ル難種其當ヲ得サル可ラサ
 ル所以ナリ宜ク估價貸
 附ノ條ト參觀スヘシ

〔後陽成天皇文祿元年五月十八日〕關白豐臣秀吉令〔城
 米トシテ京都ニ積置クモノハ手ヲ著クヘカラス
 附太

書事

〔按〕秀吉米穀ヲ貯ヘシムルコト編リ本件ニ止ラ
 ス書記ニ據ルニ當時貯藏ヲ新穀ニ易ヘ又倉庫
 ヲ川岸海邊ニ作テ之ヲ貯藏セ
 シメ以テ不時ノ用ニ備ヘリ

〔後西天皇明曆二年五月九日〕征夷大將軍德川家綱達
 駿府ノ城米ハ善ク保管シ定額壹萬石ニ不足無ラシ
 ムヘシ
 條令

〔按〕是レ駿府ノ一城ニ係ルト雖モ他ノ
 諸城亦然リ但其定額ヲ異ニスルノヨ

〔靈元天皇天和三年十月十九日〕德川綱吉令〔去年今年
 豐作タルニヨリ國主領主等各米穀ヲ貯藏シテ凶年
 ニ備フヘシ
 類教

〔按〕是レ後享保十五年亦本
 條同様ノ令有リ之ヲ畧ス

〔東山天皇貞享四年〕諸國城米高

六千石	阿部置 後守領	武藏國	忍
内 三千五百石ハ寬文元年ヨリ増ス	松平伊 賀守領	武藏國	岩槻
六千石	松平伊 賀守領	武藏國	岩槻
内 貳千石ハ寬文元年ヨリ増ス	松平伊 賀守領	武藏國	川越
六千石	松平伊 賀守領	武藏國	川越

八千石	內 貳千石ハ寬文元年ヨリ増ス	大久保加賀守領	相模國小田原
六千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	大久保彦四郎領	下總國古河
四千石	內 貳千石ハ寬文元年ヨリ増ス	戸田山城守領	下總國佐倉
四千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	牧野備後守領	下總國關宿
五千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	酒井河内守領	上野國厩橋
四千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	安藤野馬守領	上野國高崎

七千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	奥平美作守領	下野國宇都宮
千石	內 貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス	大田原備前守領	下野國大田原
貳千石	內 千石ハ貞享二年ヨリ増ス	三浦登枝守領	下野國千生
貳千石	內 千石ハ貞享二年ヨリ増ス	松平因幡守領	常陸國土浦
三千石	內 千石ハ貞享二年ヨリ増ス	太田攝津守領	駿河國田中
四千石	內 千石ハ貞享二年ヨリ増ス	井伊伯耆守領	遠江國掛川

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

五千石 青山下 遠江國 濱松 野守領

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

三千石 西尾隠 遠江國 横須賀 成守領

内千石ハ貞享二年ヨリ増ス

五千石 水野右衛門大夫領 三河國 岡崎

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

貳千石 土井式部少輔領 三河國 西尾

内千石ハ貞享二年ヨリ増ス

貳千石 稻垣信濃守領 三河國 川屋

内千石ハ貞享二年ヨリ増ス

壹萬石 松平越中守領 伊勢國 桑名

五千五拾石 板倉隠岐守領 伊勢國 龜山

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

五千石 土井周防守領 志摩國 鳥羽

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

七千石 戸田采女正領 美濃國 大垣

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

貳千石 丹羽庄之助領 美濃國 岩村

内千石ハ貞享二年ヨリ増ス

四千石 松平丹波守領 美濃國 加納

内貳千石ハ貞享二年ヨリ増ス

千石
千石
三千石
五百石
三百石

武藏國神奈川
相模國藤澤
伊豆國二島
駿河國蒲原
尾張國熱田
憲教聖典

〔按〕是レ幕府諸代ノ諸藩及ヒ直隸地ノ諸城ニ貯
ルモノニシテ一且緩急有リ若クハ凶荒飢饉ニ
遇フトナリハ之ヲ使用セシメテ爲メ幕吏ノ處定セ
シ所ナリ相模藤澤駿河蒲原等ノ如キハ城郭無
シ然トモ其貯穀城米ニ異ナラヌ蓋シテ城ハ無
子年々寶殿ヲ出シテ新穀ヲ納ルモノ米ハ概
ニ據ルニ江戶ノ貯米ハ五萬石ナリ輕須知
據ルニ享保ニ至リ諸城米額ヲ増減シ且新
斐府中ニ米千八百石駿河清水ニ登萬石ノ
ヲ置ケリ又令シテ諸國城米ヲ御用米ト改稱セ

シメ且貯穀燒失流亡ス
ルトキハ之ヲ點檢セリ

〔中御門天皇享保十七年十月〕德川吉宗令〔今年ハ關東
豐作ナルニヨリ知行有ル者ハ務ヲ多ク置米ヲ爲ス
ヘシ輕賤
須知

〔桃園天皇寶曆三年二月〕德川家重令〔今年又料所ニ於
テ置穀ヲ爲スニヨリ萬石以上ノ者モ去年置穀ノ外
ニ今秋ヨリ高一萬石ニ穀千俵ツ、圍置クヘシ御達

〔按〕教令類纂ニ據ルニ是ヨリ後置穀ノ爲ニ諸國
ノ米價漸ク貴ク民人ノ愁フ因テ令シテ置穀
ヲ沽却シ十年ニ至テ復マ
貯藏セシム其率亦同シ

〔光格天皇天明六年〕德川家治達〔諸國雜穀拂代金ヲ一
割ノ利息ニテ貸付シ其利金ヲ以テ粃麥粟稗等ヲ買

收シ郷藏ニ園置キ又ハ家産厚キ百姓ニ預置クヘシ
百姓ノ作徳ヲ以テ年々又ハ一兩年コトニ一タヒ之
ヲ積替ヘ更糶ト爲ラサルヲ要ス積替ノ時ハ手代ヲ
遣テ之ヲ檢セシムヘシ又時ニ臨テ吟味役普請役ノ
者ヲシテ之ヲ點檢セシムヘシ牧民 金鑑

〔八年二月〕德川家齊達諸國料所ノ村々高百石ニ米壹
斗麥稗粟ノ類ハ貳斗ツ、作徳ノ内ヨリ蓄積シ其人
ヲ選テ之ヲ預ケ年々新穀ヲ以テ積替ヘ不時夫食ノ
用ニ供ヘシムヘシ但公儀ヨリモ若干ノ穀ヲ下付レ
テ之ニ加フヘシ牧民 金鑑

〔按〕同書ニ據ルニ水旱風蟲等ノ凶年ニ値ヘハ夫
食糧貸ヲ以テ農民ヲ救フヲ定規ト爲セリ然ト

モ道路ノ遠近時季ノ遲速ニ由テ得失有リ且巨
額ノ米金ニ至ルトキハ毎戸徧ク之ヲ貸スニ暇
アラサルモ有リ
因テ此令ヲ下セリ

〔寛政元年正月〕達郷ニ村々貯藏スヘキ夫食ヲ家産厚
キ百姓ニ預置クコトヲ達セリ之ヲ保管スルノ村吏
等過失有ルニ非サルモ小民等狐疑ヲ抱キ貯穀ヲ喜
ハサルモノ有リ因テ代官所預所各一二ノ郷藏ヲ建
テ代官手代又ハ預所吏員臨檢シ農民ヲシテ自ラ之
ニ藏メシメ檢見ノ時代官等又之ヲ檢シ等閑ノコト
無ラシムヘシ

三ヶ年下穀ヲ爲シテ村々貯夫食ノ内ニ加ルニヨリ
彌勉テ穀ヲ出サシムヘシ但去申年分ハ出穀高二十

〔素戌年〕寛政二年

分ノ一物成ノ内ヨリ扱ニテ下付スヘシ御書付留

〔按〕村貯二十分一ノ下ケ穀ハ三年ノ制ニ
 リト雖モ爾來因襲シテ以テ明治ニ至レリ

〔九月十五日〕令近年國費多端且連年凶作ニテ窮民ヲ
 賑救スルニヨリ屢儉約ヲ令スレトモ天下ノ備ハ一
 日モ忽ニス可ラス因テ高一萬石ニ五拾石ノ率ヲ以
 テ來戌年ヨリ五今年其領邑ニ園穀ヲ爲スヘシ輕賤須知

牧民
 金鑑

〔按〕同書ニ是時又令シテ云爾地田毛ノ半ヲ損傷
 スル時ハ其一年又工事ノ役ニ服スル者ハ其年
 ヨリ三今年皆園米ヲ爲スニ及ハス但年ヲ延テ
 國ヒ五今年ノ總計ニ充ツヘシ園米ハ務テ糶ヲ
 以テシ初無キモノ八年々改竄スヘシ拜借金有
 ル者ハ定率ノ半ヲ園ヒ安ニ米穀ヲ酒造ニ費サ
 シムヘカラス又萬石以下ハ萬石以上園穀ノ意
 ニ違ヒ各自領邑ニ貯フヘシ但萬石以上ノ率ニ

准スルニ及ハスト其處分
 方亦以テ見ルヘキナリ

〔二年七月廿四日〕令舊ニ凶作ナリシニ近年豐作ナル
 ニヨリ凶年ノ備へ自然等閑ニ流ルヘキ憂有リ務テ
 置扱園米ヲ爲シ又領内ノ者ヲシテ分ニ應シテ園ハ
 シムヘシ輕賤須知

〔八月四日〕達頃口米價賤ク今秋豐作ニテ一層下落シ
 四民却テ困却スヘシ且小民ノ如キハ作徳ノ利潤少
 ク豐作ヲ憂ルニ至リ太々農業ニ關係スル所有リ因
 テ料所ノ百姓ヲシテ分限ニ應シ米穀ヲ買入レ又ハ
 賣ルヘキ分ヲ園置カシムヘシ牧民金鑑

〔十月〕達園夫食積替ニヨリ其高ニ欠減ヲ生シ之ヲ償

ヒ又ハ郷藏修理ノ費用ヲ村ニ課スルトキハ農民救濟ノ本旨ニ背ク因テ村中ノ人別ニ應シテ半年分ノ夫食ヲ圍ヒ其餘ヲ貸シ利息ヲ以テ其費用ニ充ツヘシ牧民金鑑

〔三年十二月〕令諸國ハ大名ノ圍穀ヲ始トシテ各凶年ノ備有リ獨リ江戸ノミ其備無キニヨリ町法ヲ改正シ町費ヲ減省シテ圍穀積金ヲ爲スヘシ町費減少ノ内七分ヲ積金圍穀トシ二分ハ地主之ヲ收メ一分ハ町費ノ餘分ト爲スヘシ但臨時ノ費用有リトモ町費ノ餘分ヲ以テ辨スヘシ公儀ヨリ金壹萬兩ヲ下付スルヲ以テ積金ニ加フヘ

シ圍穀積金ハ凶年ニシテ一同飢餓ニ至ルヘキ時ニ下付シ尋常米價ノ貴キカ如キハ否セス但積金ハ地主等ノ出ス所ナルニヨリ後來地主等災害ニ罹ル時ハ之ヲ檢シテ下付或ハ貸與シ借家ノ小民タリトモ老幼ニテ飢餓ニ迫ルノ類ハ之ヲ給與スヘシ市街ノ内間マ積金モ爲シ難キ困窮ノ所有リ是等ハ他所積金ノ利息ヲ以テ救助スヘシ天保築成〔享和三年十二月〕達代官所預所ノ村々貯穀ヲ賣リ代金ヲ貸シ利金ヲ以テ糶ヲ買入レ圍置クモノ其他ノ貯穀纒ニ四五年ヲ經レハ更痛ヲ生スト唱へ賣替又精米ニ易ルモノ有リ其欠減有ルコト勘カラス且屢

積替ノ勞有ルニ由テ村民等貯穀ヲ厭フニ至ルト聞
 ク糶ハ米ニ異ニシテ屢積替ヲ爲スニ及ハス既ニ淺
 草其他ノ米廩ニテ之ヲ試ルニ概テ二十个年ヲ保テ
 リ因テ以來糶ヲ以テ圍置キ二十个年コトニ積替ヘ
 シムヘシ然ラハ其勞費少カラシム
〔按〕其他ノ貯穀トハ天明八年ノ達ニ言フ所
 ノ如クニシテ米麥粟稗等ヲ概言スルナリ
 〔仁孝天皇天保十二年十月十四日〕德川家慶令二三年
 以來豐作ナルニヨリ料所ニ圍穀ヲ命ス私領ハ高壹
 萬石ニ糶百石ノ率ヲ以テ今年ヨリ五年間年々各領
 邑ニ圍置クヘシ幕令類纂
 大日本租稅志卷之六十一終

大日本租稅志卷之六十二

大藏權少書記官正七位野中準等修

檢地法

〔按〕檢地トハ田地ヲ檢校スルナリ上世既ニ田畝
 ヲ檢シ町段ヲ定メ地ヲ度ルニ尺ヲ打ツ尺度ハ舊
 鎌倉府ノ時往々繩ヲ曳テ丈尺ヲ以テ一歩ト爲セリ
 足仍テ曲尺ヲ用ヒ方尺可ラテ尺臣氏ニ至テ六
 尺三寸竿ヲ用ヒ間マ六尺或ハ六尺五寸ノ竿ヲ
 用フ徳川氏ハ六尺一分ヲ以テ檢地ノ率ト爲
 ス其ナリ而シテ二分竿及ヒ管繩ヲ用ルハ從
 フナリ道溝山野ノ地位石盛ヲ定メ地積ノ奇數ヲ加
 ムシテ享保以來改更スル所無シ凡ソ檢地ハ土
 地ノ經界ヲ正シ租率ノ基礎ヲ立ルモ檢地ニシテ
 民人ノ休戚國家ノ氣運ニ關係スルヲ以テ歴世
 之ヲ慎重ス檢地ニ古檢新檢居檢地廻檢地地押

春檢地秋檢地等ノ稱有リ凡例録ニ云古檢ハ六尺三寸竿ニシテ文祿年中ニ在シモノ新檢ハ慶長以後ノモノヲ謂フ居檢トハ古檢ノ地又ハ地味善クシテ廣キ所等之ヲ檢スル時段ニ餘數有リト雖モ村民ノ所願ニ從テ之ヲ檢セ止タ照料シテ其高及ヒ租率ヲ増加スルヲ謂フ廻檢地トハ田島ノ四圍ヲ圍寫シ之ニ依テ其段別ヲ檢スルヲ謂フ地押トハ地位石盛皆ニ依リ止タ竿ヲ打テ段別ヲ檢スルヲ謂フ地又地詰ト稱ス春檢地ハ其年ヨリ高ニ入レ秋檢地ハ其一年分ヲ見取ト爲スノ定法ナリト今文祿以來檢地條例ノ一ニ採録シ餘ハ大同小異ナルヲ以テ之ヲ省ス前篇田制總錄ノ條ト參觀スヘシ

〔後陽成天皇文祿三年六月十七日〕關白豐臣秀吉檢地條例田島屋敷五間六十間三百步ヲ一段トシ六尺三寸ノ竿ヲ以テ檢地スヘシ
上田ハ一石五斗中田ハ一石三斗下田ハ一石一斗下

々ハ照料シテ定ムヘシ
上島ハ一石二斗中島ハ一石下島ハ八斗下々ハ照料シテ定ムヘシ
屋敷ハ一石二斗タルヘシ
山島野島河原島ハ先斗代ノ如ク照料シテ定ムヘシ
山手錢鹽濱小成物ハ照料シテ定ムヘシ
在々ノ上中下及ヒ井懸リ麥田日損水損等善ク甄別シテ斗代ヲ定ムヘシ
村切ニ持所ヲ立テ入組無ク相究ムヘシ從來榜示疑ハシキニ依リ鄰郷ノ上使ト相議シ新ニ經界ヲ定ムヘシ

升ハ京升ニ一定シ他ノ升ハ悉ク取上クヘシ
檢地帳ハ百姓ニモ之ヲ寫サシメ檢地奉行證印シテ
下付スヘシ

給人百姓ノ賄賂ヲ取ルカ如キ私曲ノコト有ラハ速
ニ之ヲ糺シ竿打ノ者違失有ラハ成敗スヘシ文 地沙檢

〔按一間ハ一步ナリ横五步縱六十步即チ三百步
ト爲ス是係伊勢國ニ令スル所ナリ他ノ諸國ニ
令スルモノ率于此ニ
同シ因テ之ヲ略ス〕

〔靈元天皇延寶六年三月〕征夷大將軍德川家綱檢地條
例〔檢地ノ時ハ先ツ手代竿取等相會シテ竿ヲ檢シ檢
地中毎日再ヒ之ヲ檢シ善ク協議シテ不同無ラシム

ヘシ

鄰郷ノ經界偽ナク橋導スヘキ旨ノ手形ヲ村民ヨリ
取ルヘシ

一村コトニ田畠上中下野山池川堤堀道等ノ切繪圖
ヲ取ルヘシ

間竿ハ六尺一分ニ定ム煤竹ヲ善ク揉テ之ヲ用フヘ
ク間繩ハ其延縮ヲ檢査シ整横寸尺ヲ打チ寸ヲ捨テ
尺マテヲ勘定スヘシ毎日繩ヲ以テ屢竿打ノ間數ヲ
檢シ若シ差フコト有ラハ復タ細繩ヲ以テ之ヲ檢ス
ヘシ

一村ノ檢地終リ他ノ一村ニ移ラハ先ツ村境マテヲ

大日本國史記卷之六十二 律令

〔卯ノ半時〕蓋ノ
六ツ半時即チ
日出後ナリ
〔申ノ上刻〕蓋ノ
七ツ時即チ日
入前ナリ

巡見シ古來上下ノ地坪ヲ檢シテ今上下位ヲ易ルモ
ノヲ細察シ古水帳ノ田畑屋敷總町歩上中下ト今巡
見スルモノト比照シテ後檢地スヘシ
檢地ハ毎日卯ノ半時ヨリ申ノ上刻マテトス
豎横未タ打タサル時其坪ノ段歩ヲ巡見シ新檢ニ過
不足有リト認メ又百姓ヨリ間數縮退セリト申出テ
ハ改檢スヘシ
畑境ノ疇ハ之ヲ除キ田中ノ疇ハ打入ルヘシ畑境ハ
疇植ノ所マテ檢地スヘシ
棚田ノ疇ハ總テ之ヲ除キ山ノ尾ニ在ル片下リノ畑
ハ勾倍ヲ考テ檢スヘシ

〔ク子區〕墾墾生
區ヲ稱ス

木陰蔽陰ハ除クヘシ
屋敷ノ垣ハ之ヲ除キ庭ハ打入レ又屋敷ノ中ニ畑敷
有ラハ皆打入ルヘシ
ク子垣横一間マテハ之ヲ除キ其餘ハ居敷ノ如ク檢
地スヘシ但四壁横二三間有ラハ悉ク段歩ニ入ルヘ
シ
百姓屋敷ニ連ナル竹木ノ林ハ屋敷段歩ノ外ニ打ッ
ヘシ
漆桑楮茶蜜柑柿等ハ總テ段歩ニ打入ルヘシ
田畑上中下ノコト其地面大ナルモノハ四方ヲ檢シ
テ之ヲ定ムヘシ土ノ善惡敷廻リ井溝ノ近所日當リ

山陰野端レ流ノ末片下リ北向濕氣冷場水旱損場等
種々ノ別有リ必シモ當作ノ佳惡ニ依ラス若シ決シ
難キ事有ラハ鄰領ノ檢地奉行ト協議シテ定ムヘシ
山稼浦稼ノ村ハ農業疎畧ニテ作毛惡シ地面一從テ
上下ノ位ヲ定ムヘシ

島畑ハ率子一位ヲ下クヘシ但將來田ト成ルヘキ所
又廣大ナルモノハ地面ニ隨フヘシ田ニ接スル畑畔
ヲ五步七步等ノ田ト成スハ畑ノ内ニ加ヘ堀田ト稱
スヘシ

郷藏屋敷モ檢地スヘシ

從來ノ道溝崎畔等新ニ廣クル所有ヲハ田畑ノ内ニ

打入レ速ニ注進スヘシ

石盛ハ古水帳ニ從ヒ石盛不相當ノ所ハ下知ヲ得テ

定ムヘシ檢地定例

(按)是レ伊豆國ノ地ヲ檢スル時用ルモノニシテ
徳川氏ノ初代ヨリ設ル所ナリ徳川實記ニ據ル
ニ慶安中檢地條目ヲ定ル事有リ本
文ト大同小異ナルヲ以テ之ヲ畧ス

〔貞享三年三月〕徳川綱吉檢地條例檢地ハ百姓進退ノ
定ル所ナリ能ク注意シテ繩目ニ退縮無キヲ要ス從
來田畑上中下野山林川除等有ル所ハ圖ヲ取テ巡見
シ概定ノ上正ク檢地スヘシ但檢地終リシ田畑ハ標
榜ヲ立ツヘシ

間竿ハ六尺二間竿ニテ一間ニ一分ヲ加ヘ長サ一丈

二尺二分ノモノヲ用フヘシ但百姓ノ屋敷ハ四方ト
モ一間ツ、之ヲ除クヘシ
田畑ノ位付ハ率子上中下ノ三等トスレトモ地ノ善
キ所ハ上々ノ一等トシ惡キ所ハ下々ノ一等ヲ立テ
上々上中下下々ノ五等ト爲スヘシ上々下々無キ所
ハ舊ニ從フヘシ但位付ハ百姓ニ誓詞ヲ命シ色付ヲ
爲サシメテ定ムヘシ
畑ノ漆桑楮茶藺等有ルモノハ其分檢地ヲ除キ別ニ
年貢ヲ申付クヘシ
三十年以前ヨリ除地ト爲シ來ル所ハ縦口證文無ク
トモ之ヲ除キ三十年以後ノ除地ハ檢地シテ高ニ入

ルヘシ
大石大木有ル等耕作シ難キ所ハ檢査ノ上之ヲ除ク
ヘシ
間數肥帳ノ後置年又ハ管繩ヲ以テ伸縮ヲ檢スヘシ
田畑ノ石盛位付ハ隣村近郷ヲ照料シ甲乙無キヲ要
ス山野ノ村ハ例外トス早水損傷用水惡水林陰日向
等ヲ考テ位付ヲ爲スヘシ
料所私領寺社領等入會ノ所ハ各會同シテ檢地スヘ
シ
地面入會ノ所ヨリ標榜ヲ立テ十文字形曲尺ニ違フ
コト無ク豎横ニ檢地スヘシ

大日本種族志 卷之六十一 五 大藏

從來經界正シカラサル所ハ兩村ヲ審査シ異論無キ
旨ノ手形ヲ取テ定ムヘシ但檢地終ラハ境杭ヲ立ツ
ヘシ

朱印地其他寺社領等確證有ル除地ハ之ヲ除キ確證
無ク又古水帳ニ載セサル所ハ檢地スヘシ
年貢米ノ藏屋敷ハ檢地シ年貢ヲ除クヘシ

野手山手山林等ノ所ハ檢地シ廣キ山ニテ經界分明
ナラサル所ハ檢地ニ及ハス

料所小物成ノ所見取場ノ高ニ入ルヘキ所ハ檢地ス
ヘシ

檢地ノ帳簿ハ一々百姓ニ示シ其異同ヲ審査セシム

ヘシ
須知

〔按〕是レ上野國ノ地ヲ檢スル時用ル所ニシテ
實ノ條例ニ比スレハ較ヤ密ナリ元祿ニ至テ信
濃國ノ地ヲ檢シ又飛騨國ノ地ヲ檢ス其
條卓率子本文ニ同シ因テ皆之ヲ畧ス

〔中御門〕天皇享保十一年八月〔德川吉宗制條〕關東所々
新田畑屋敷ノ檢地ハ番付ノ地引帳ヲ制シ田畑一所
コトニ其段畝歩地主名主等ヲ記スル札ヲ建テ檢地
終ルニ從テ札ヲ撤セシムヘシ

村境新古田畑ノ境等ハ豫メ其地ノ名主組頭莊屋年
寄等相會シテ杭ヲ境ニ建テシムヘシ但境界雙方異
論有テ分明ナラサル所ハ繪圖ヲ以テ稟問スヘシ
其村名主年寄組頭等吟味ノ上相當ニ人數ヲ命シ落

地セサルコト又道路用水溝堀等ニ無益ノ事無ク案
内スヘキ旨ノ誓詞ヲ申付クヘシ

間竿ハ六尺一分ノ率ニテ長サ一丈二尺二分ノモノ
ヲ用フヘシ

繩ハ一間ツ、ノ管繩ニテ間數ノ札ヲ附シ長サ六十
間或ハ三十間ノモノヲ用フヘシ繩ニ伸縮有ルヘキ

ニヨリ早朝四ツ時八ツ時ニ之ヲ檢査スヘシ
間數ノ端尺ハ六寸一尺二寸一尺八寸二尺四寸三尺

三尺六寸四尺二寸四尺八寸五尺四寸右寸尺一足ラ
サルモノハ之ヲ捨ツ步詰一分ハ捨テ二分ハ三分ニ

足シ是ヨリ以上ノ端歩ハ之ニ准シテ加捨スヘシ

〔圖ツ時巳ノ刻
ナリ
尺少時承ノ刻
ナリ〕

藏屋敷ハ檢地高ニ入レ物成引ト爲スヘシ

田畑ノ内大石大木塚等之有ル所ハ除クヘシ

新田畑屋敷林畑ノ内上請ノ上寺社ヲ建ル分ハ除地

ト爲シ否ヲサル者ハ檢スヘシ廟所ハ見捨地ト爲ス

東南ニ高所有リ又道路並木有ル所ハ照料シテ田畑

陰引ト爲スヘシ

疇除ハ一尺ツ、トシ類地ハ疇トモ一尺五寸ツ、タ

ルヘシ高疇ハ照料シテ之ヲ除クヘシ

屋敷ハ四方トモ一間ツ、除クヘシ但小屋敷町並ノ

屋敷ハ照料シテ除地ト爲スヘシ

新田畑ノ位付ハ其村本田畑ノ位ニ本キ上上ノ下中

中ノ下下下ノ下皆一斗劣ニ定メ屋敷ハ其村ノ上畑ニ准スヘシ
 屋敷ノ内家下庭等ハ上畑ニ准シ其畑藪林ハ各照料シテ定ムヘシ
 漆茶桑楮等ノ所ハ其植物ニ拘ラス土地相當ノ位付タルヘシ
 早損水損ヲ申出ルモ一切聽サス其土地相當一石盛ヲ定ムヘシ
 竹木葭芝等開發シテ田畑ト爲ルヘキ所ハ檢地シテ地主ヲ定メ田畑ト爲ラサル所ハ照料シ林畑或ハ山野錢ヲ付スヘシ

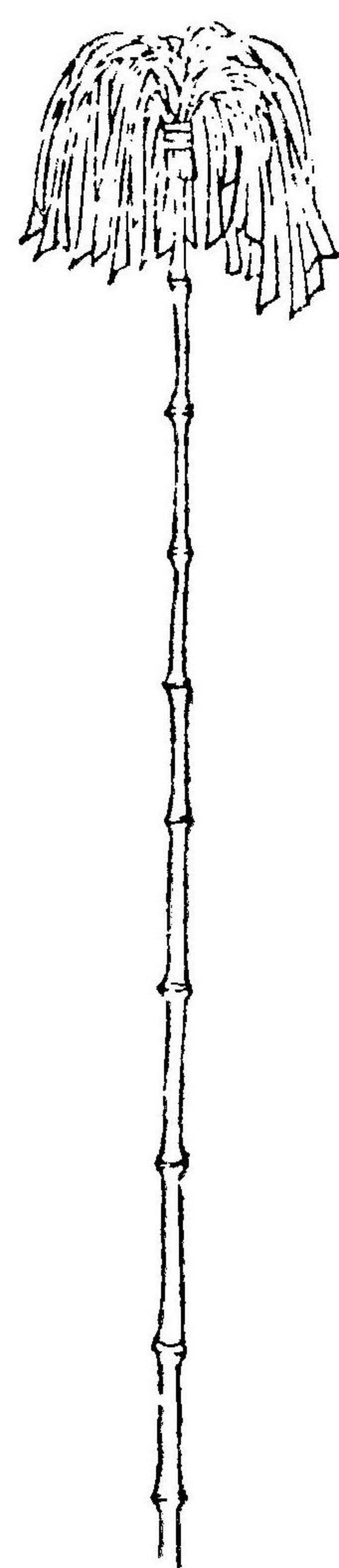
兩毛作片毛作ノ地ハ差別無ク土地相當ニ石盛ヲ定ムヘシ
 田畑ノ位付ハ土地再檢ノ爲ナリ因テ檢地終ラハ又更ニ檢シテ石盛位付ヲ爲スヘシ
 檢地帳成ラハ代官勘定吏竿取案内ノ百姓等連印シ一冊ヲ名主ニ下付シ一冊ヲ代官ヨリ勘定所ニ出スヘシ
 竿取繩引等ノ外檢地ノ所ニ無用ノ人足ヲ加ヘシムヘカラス
 間數段畝歩石盛ヨリ竿打繩引ニ至ルマテ百姓ニ於テ異論無クハ連印ノ證書一札ヲ取ルヘシ
輕賤須知
牧民金鑑

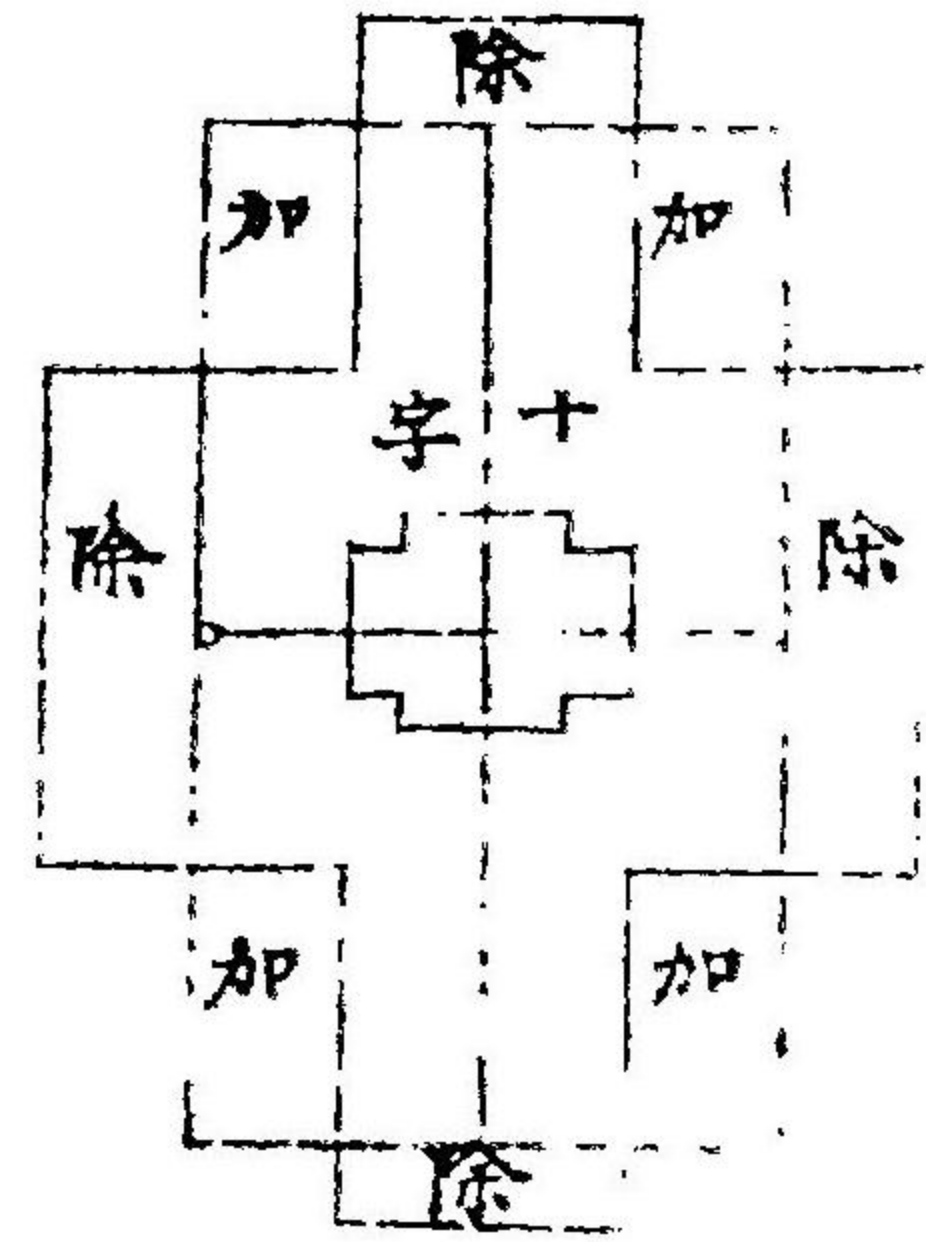
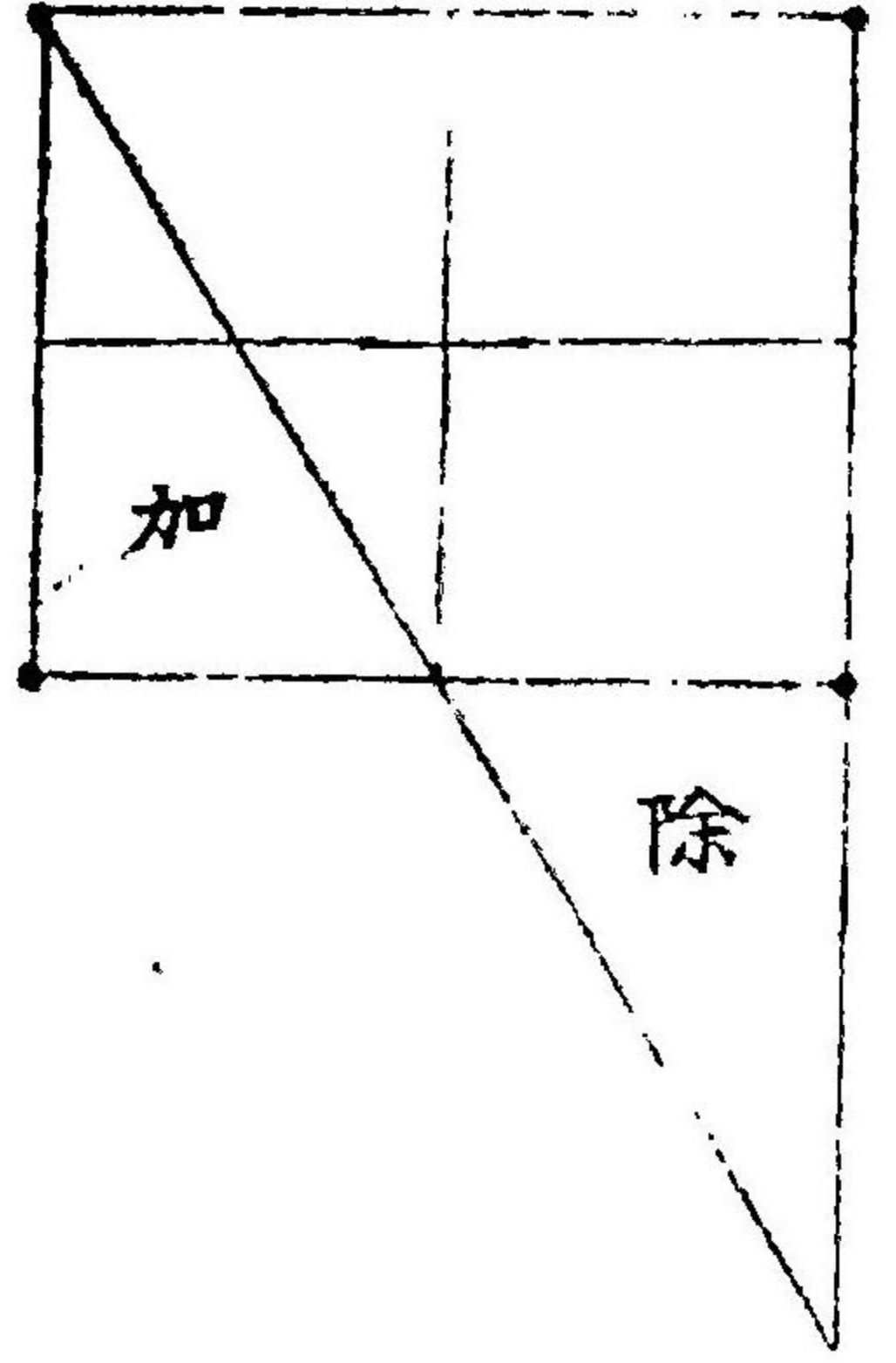
〔按田地ヲ度ルニ四至ニ標竿ヲ立テ縦横間數ノ出入ヲ視ルモ有リ之ヲ間頭ト謂フ長一丈三四尺許其未ニ長サ一尺四五寸幅一寸許ノ紅布或ハ白布ヲ束テ以テ識別ニ便スルナリ間竿ハ長サ一丈二尺二分ニシテ銅ヲ以テ其兩端ヲ包ミ半ニ一丈二尺二分ヲ刻ス六寸ヲ一分爲シ一分ヲ五分ニ割タトニ記印ス六寸以下ハ否セス是レ一丈ニ滿タレハ之ヲ捨ルカ故ナリ今舊記ノ間竿間頭及ヒ田地丈量ノ如シ

間竿ノ圖



間頭ノ圖

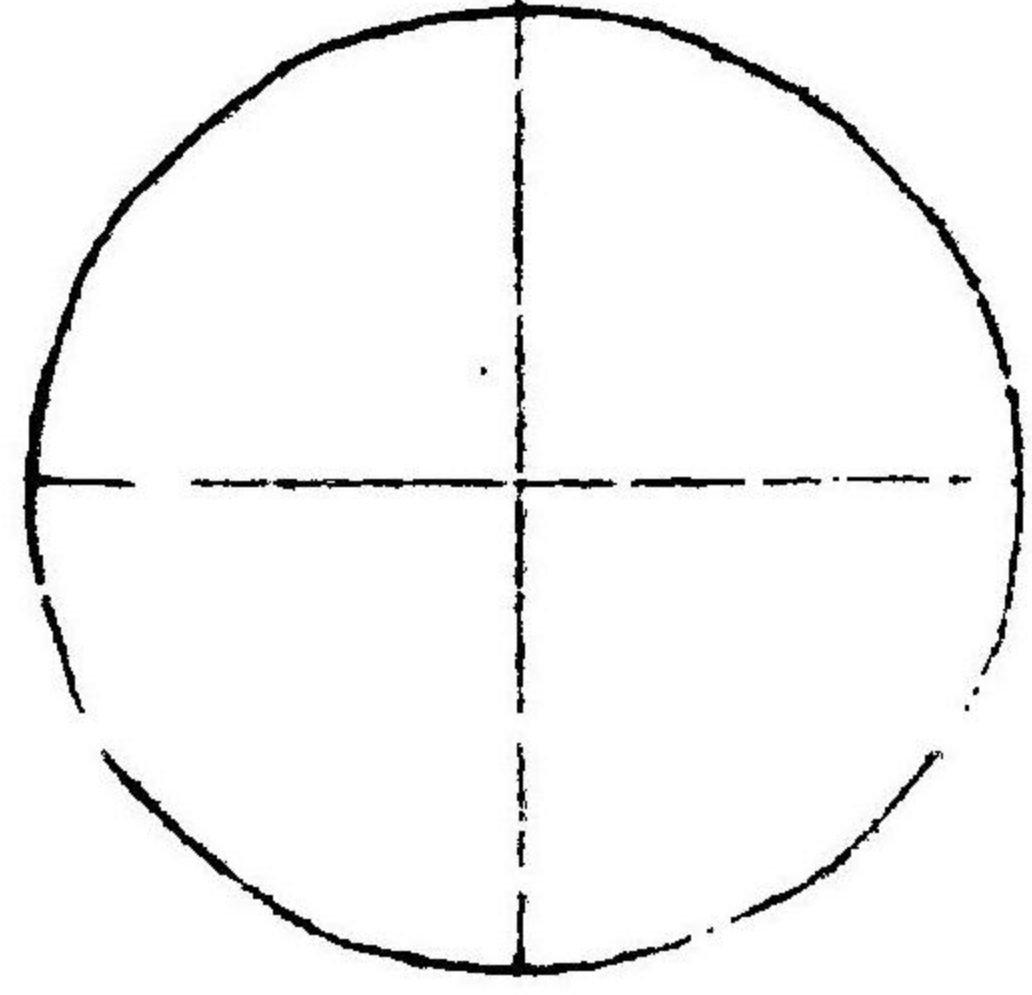
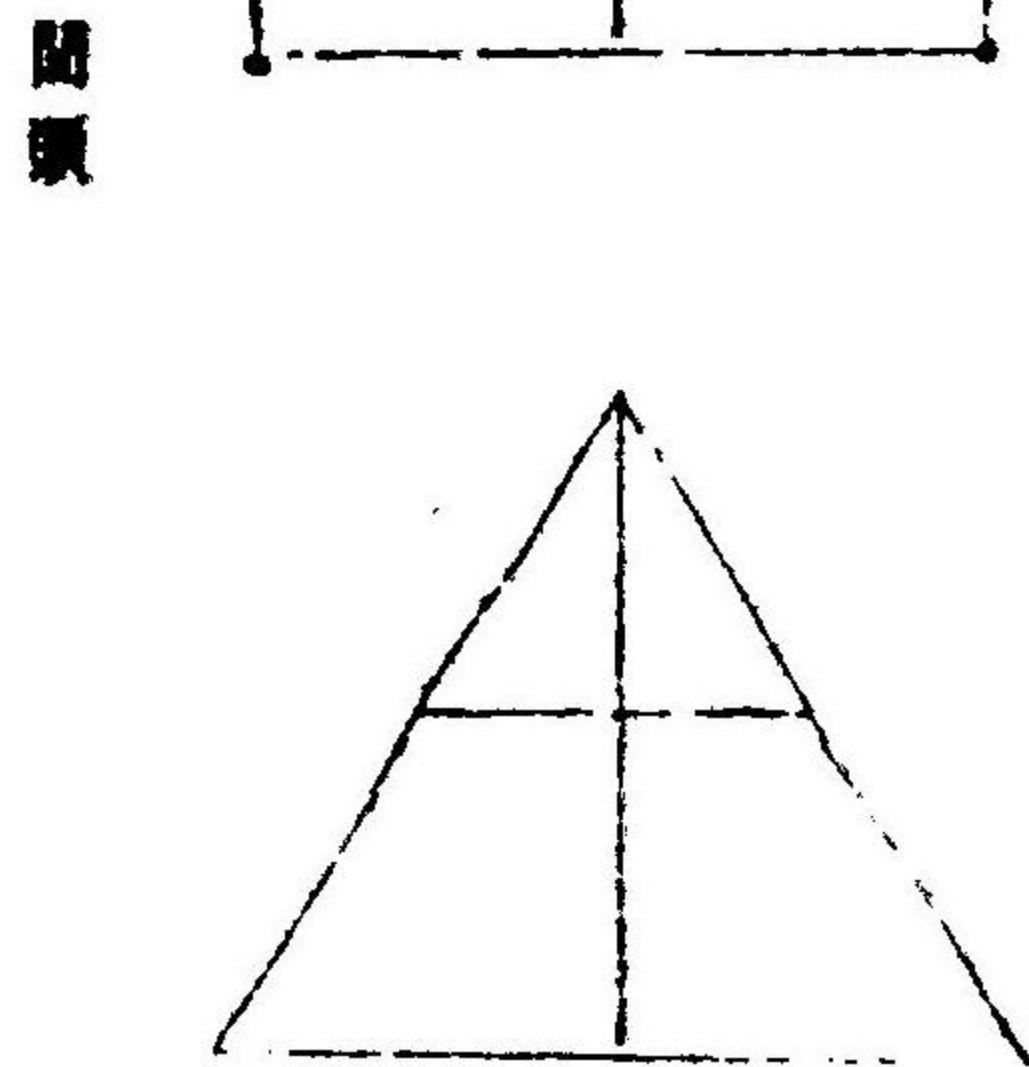
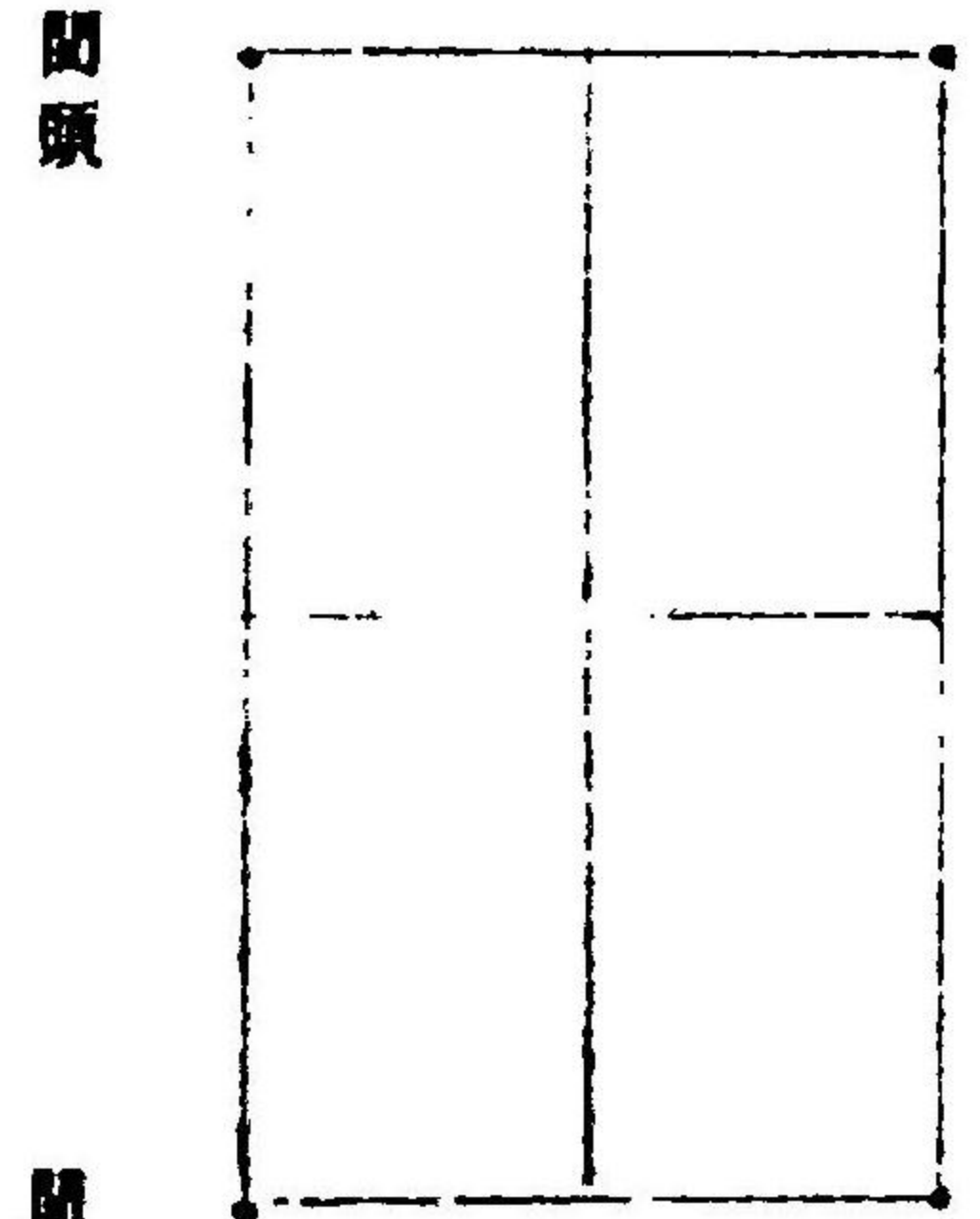




間頭 四角八十文字ニ打ツ

間頭 三角十文字

圖形ハ其徑ヲ打チ之ヲ自乘シテ又
七九ヲ乘ス乃チ坪ヲ得ル一ヨリ作
リ歩ト爲ス

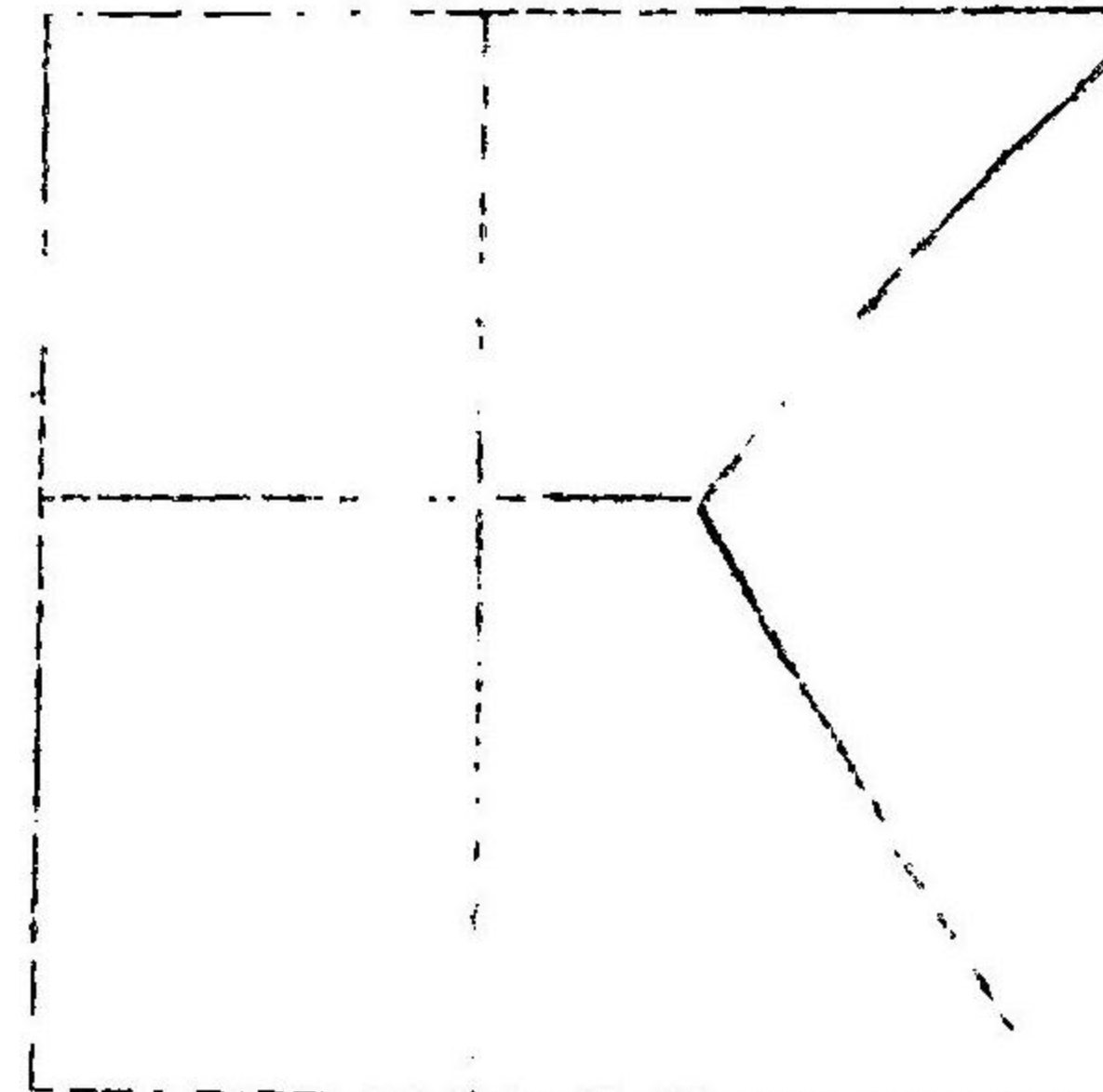
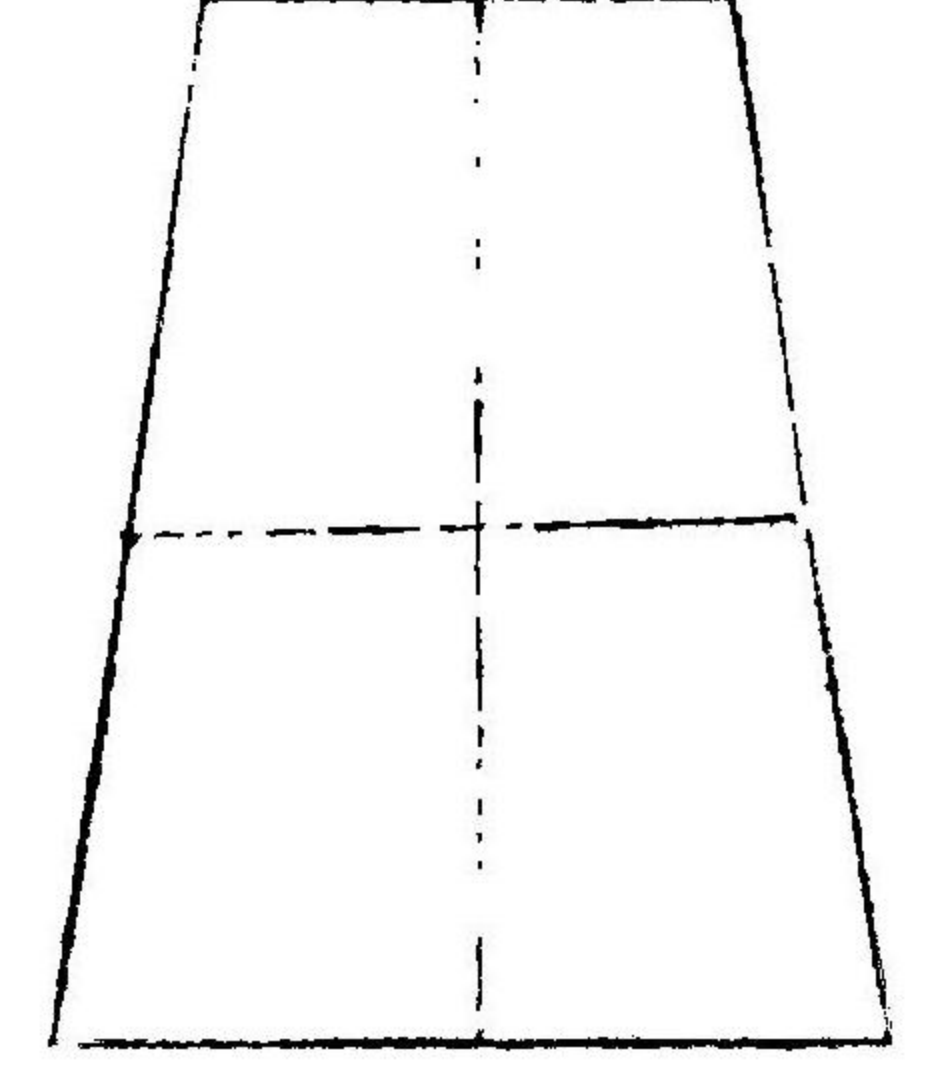
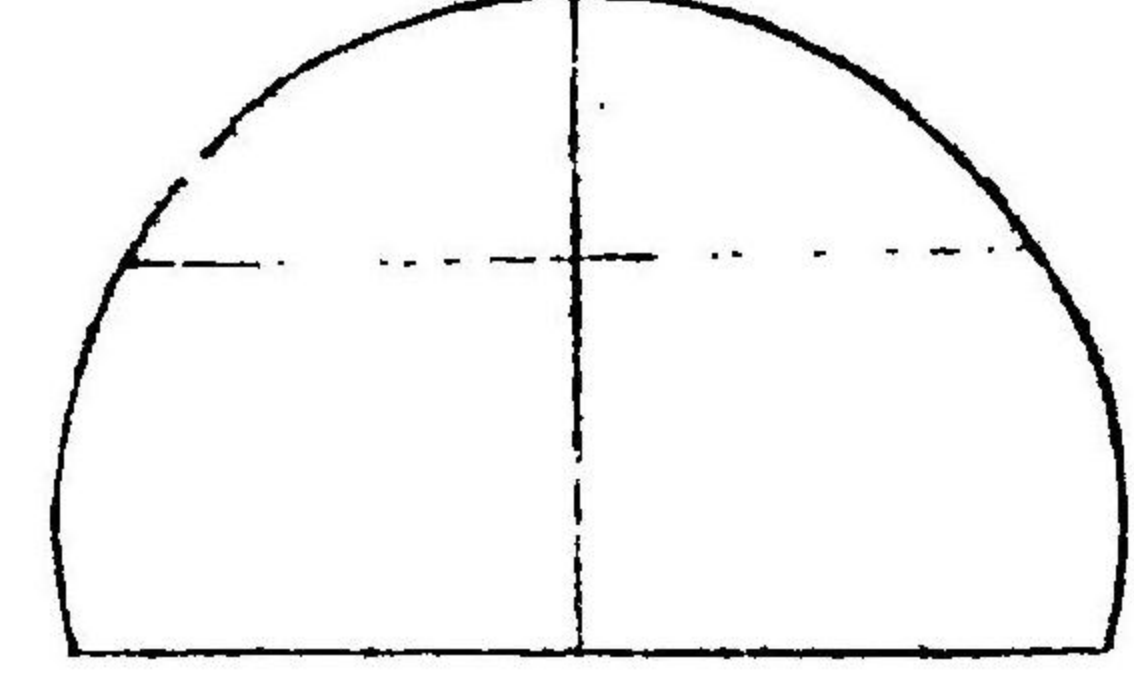


半月見込繩

此類八十文字繩ナリ

新ノ如ク横竿ヲ少クスルコト
平均ノ心ナリ見込十文字ト稱
スル繩ナリ

横竿ニツト有
少打コ

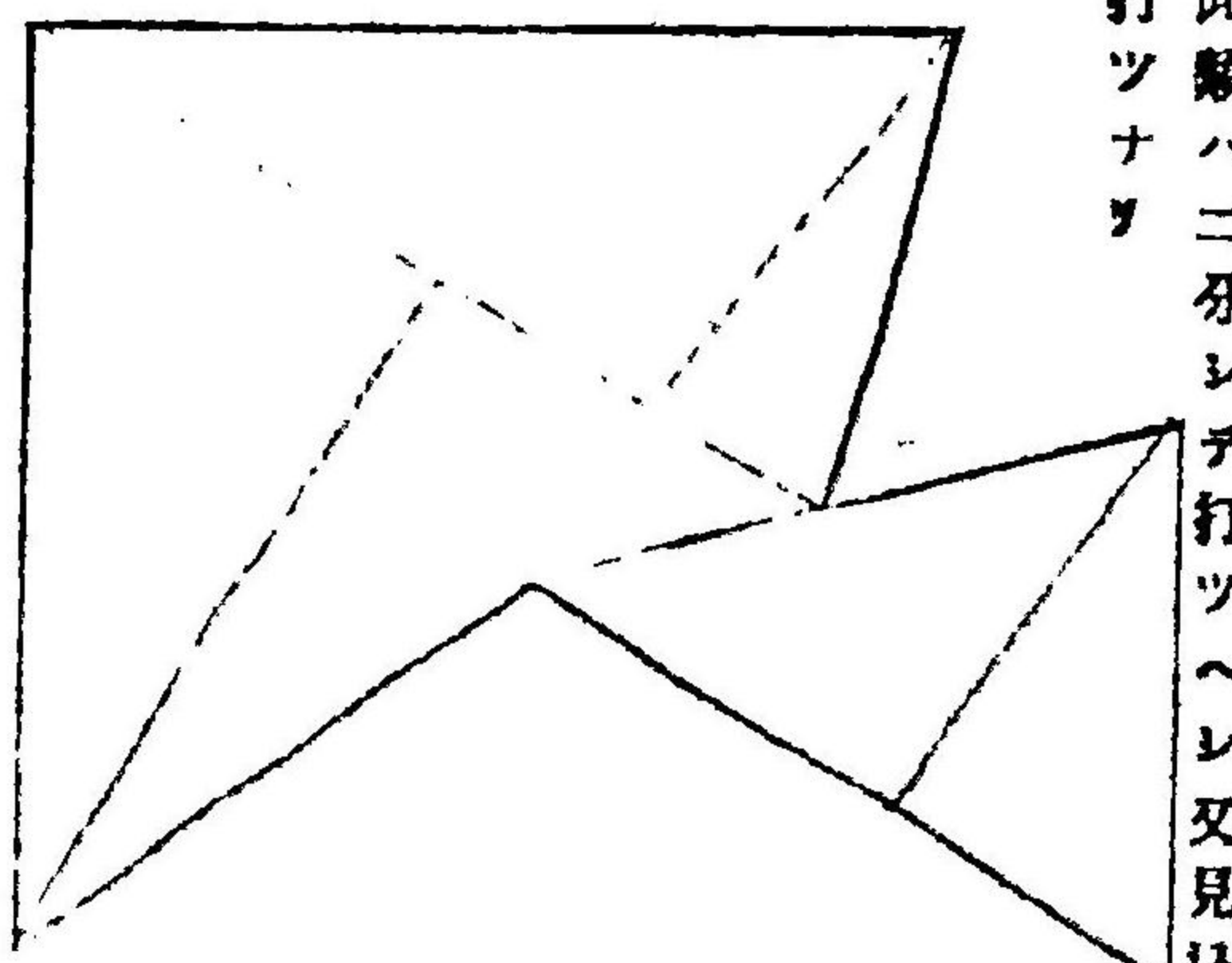


若レ所々少
ク出入アル
所ハ横竿ヲ
三所ニ打テ
平均スルコ
ト有リ

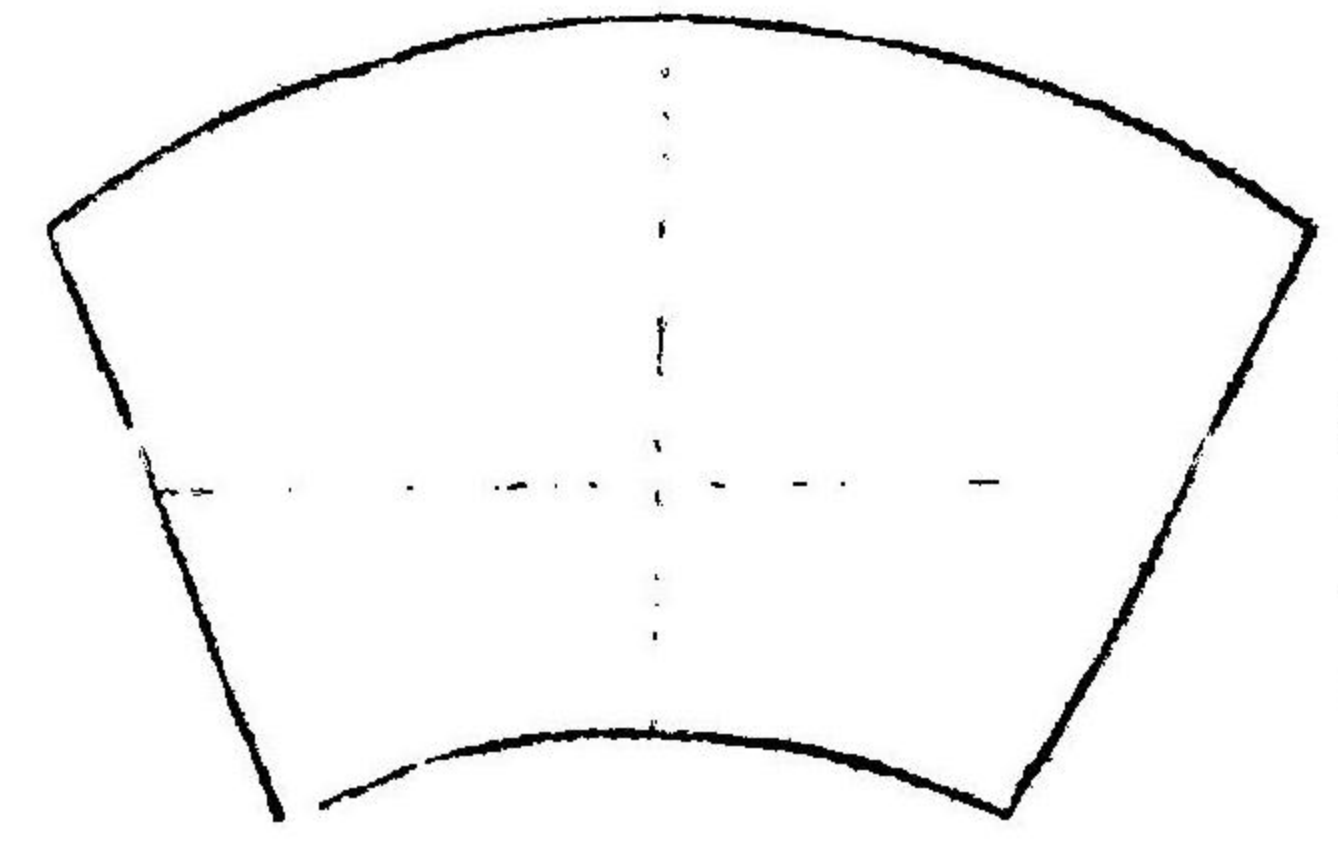
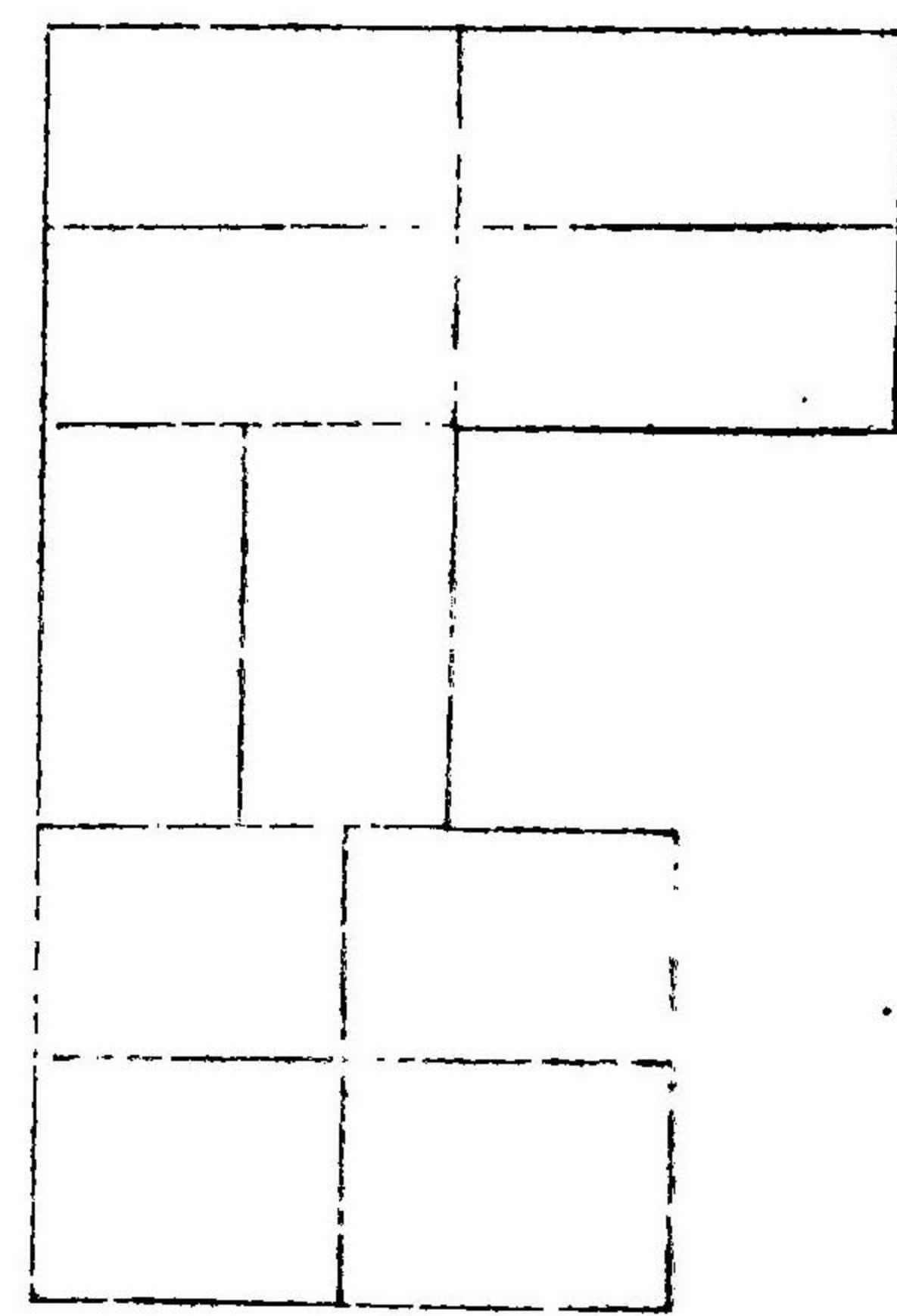
此類ハ二分シテ打ツヘレ又見込ニ打ツナリ

縦ノ内隔ノ縦ノ横間ニ三切シテ打ツ又三所平均スルモ有リ

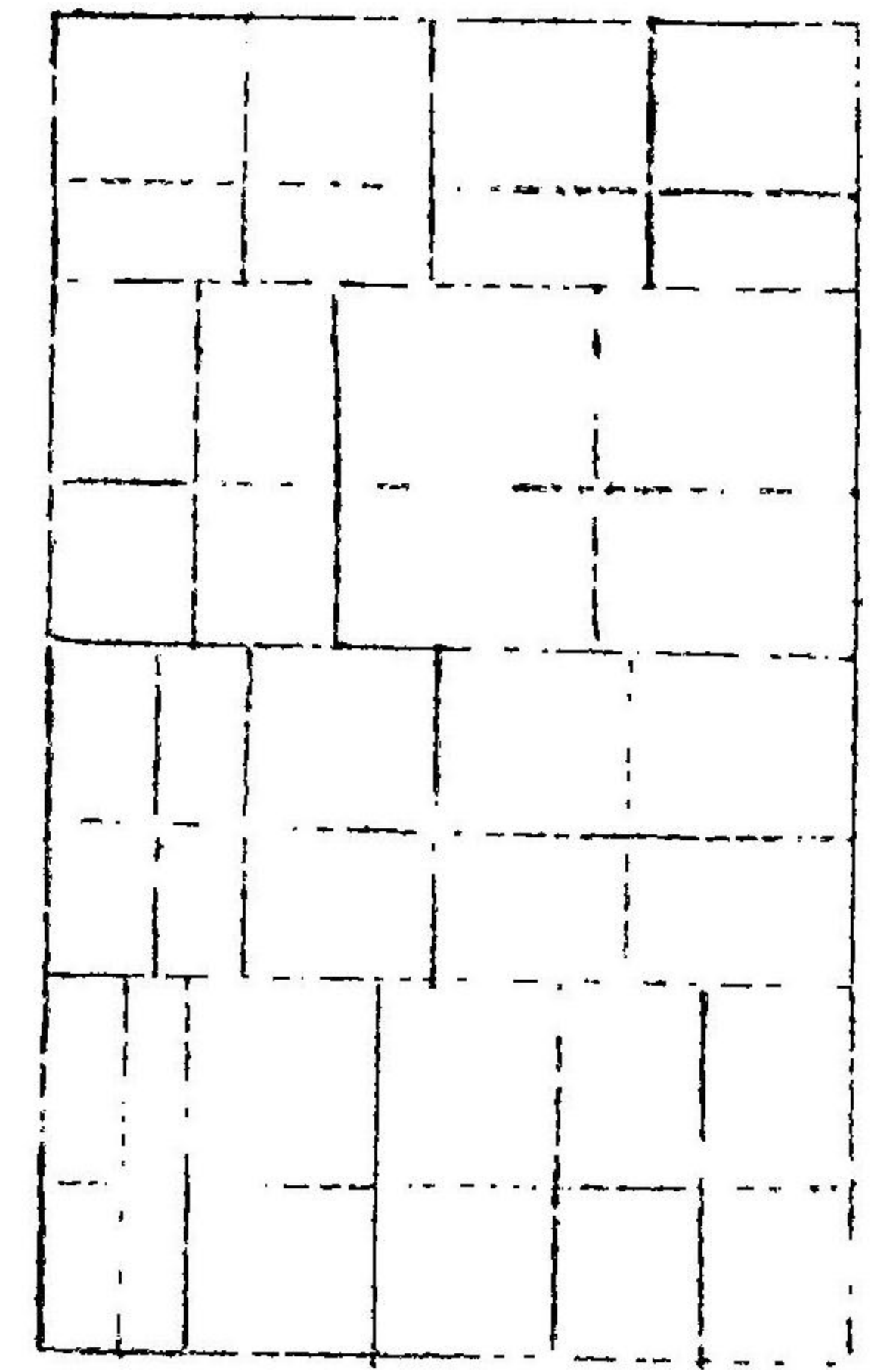
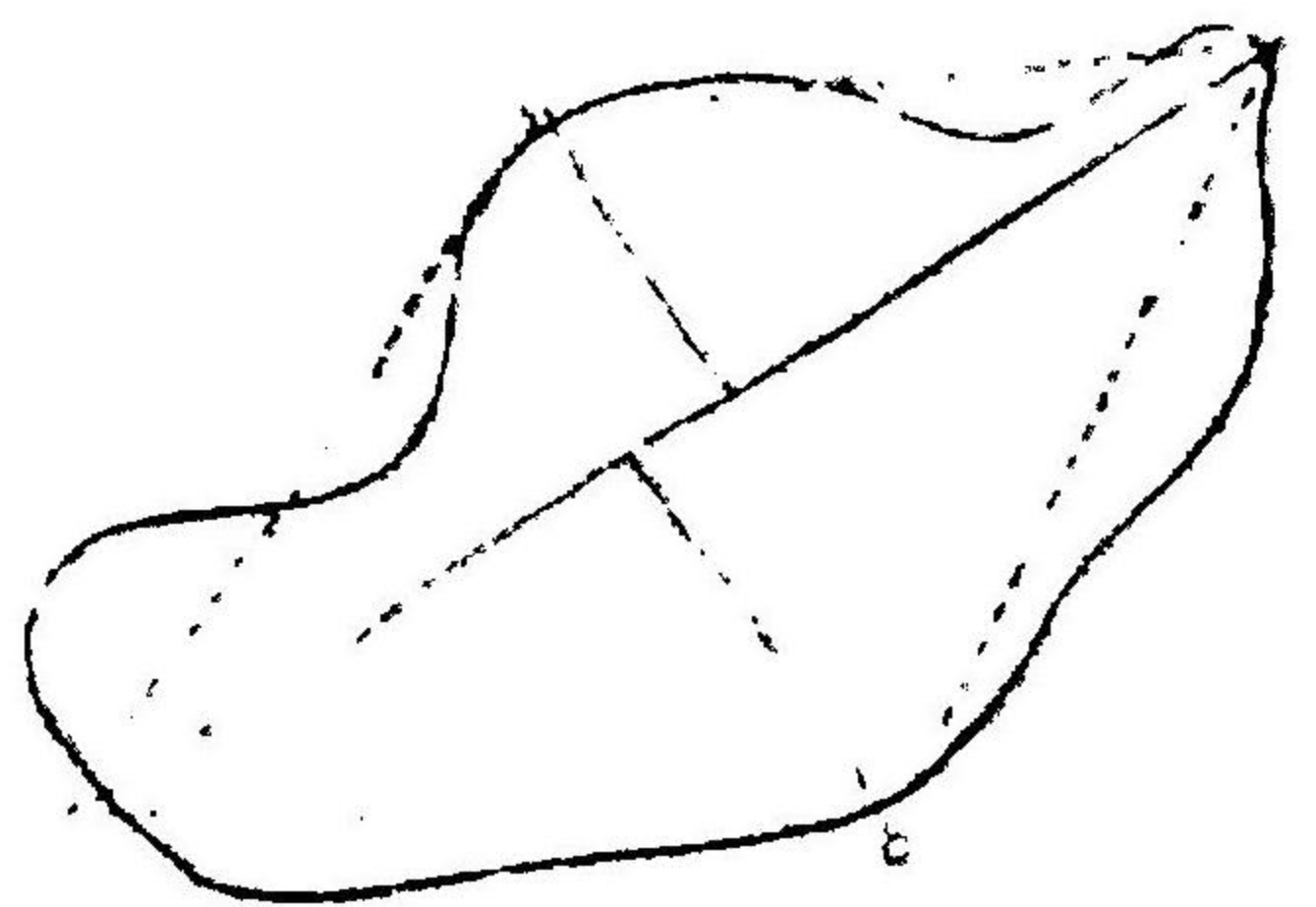
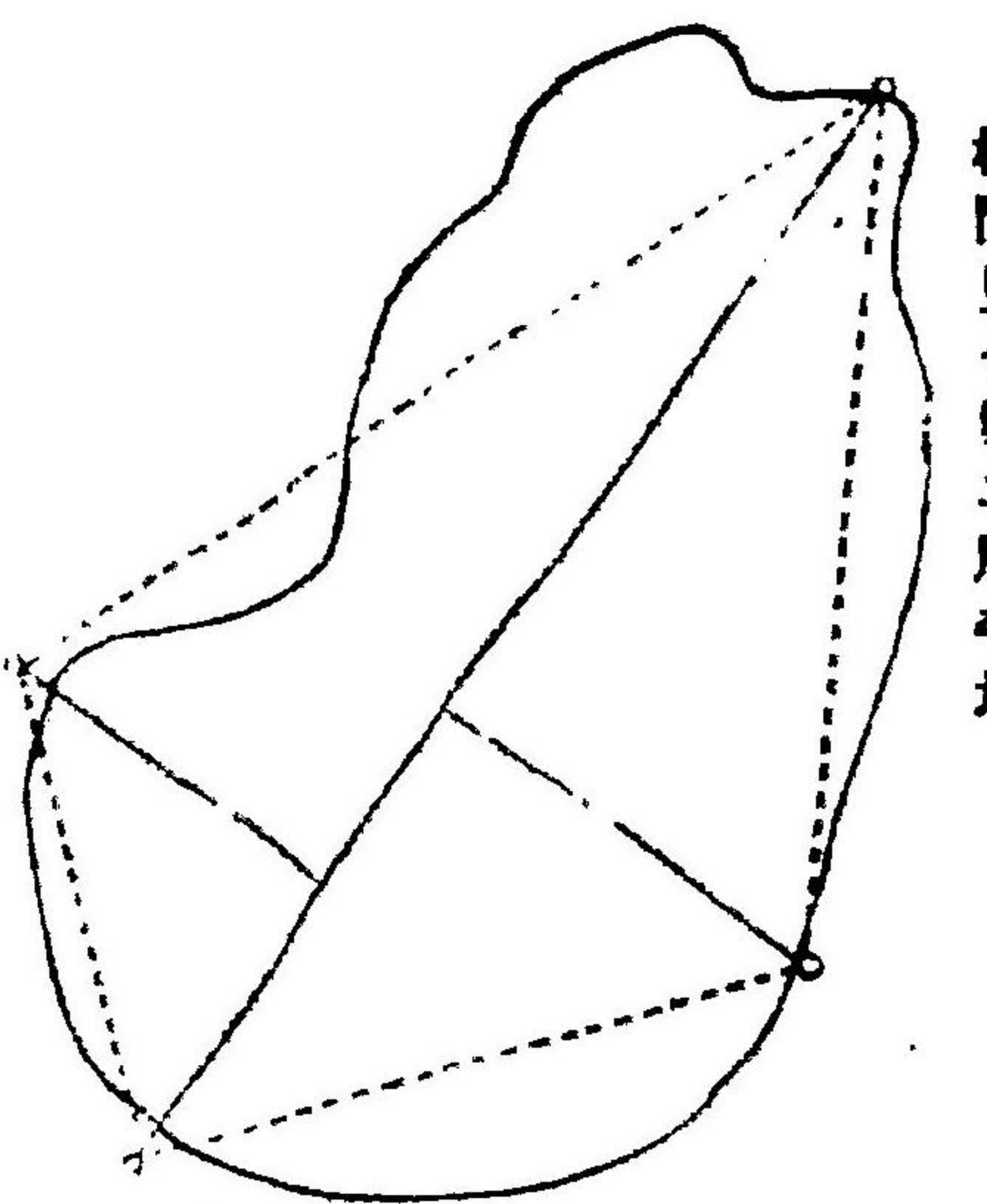
地紙形ハ概テ十字字アリ但形ノ趣キモハ見込ニ打ツナリ



横間見合盤二所平均

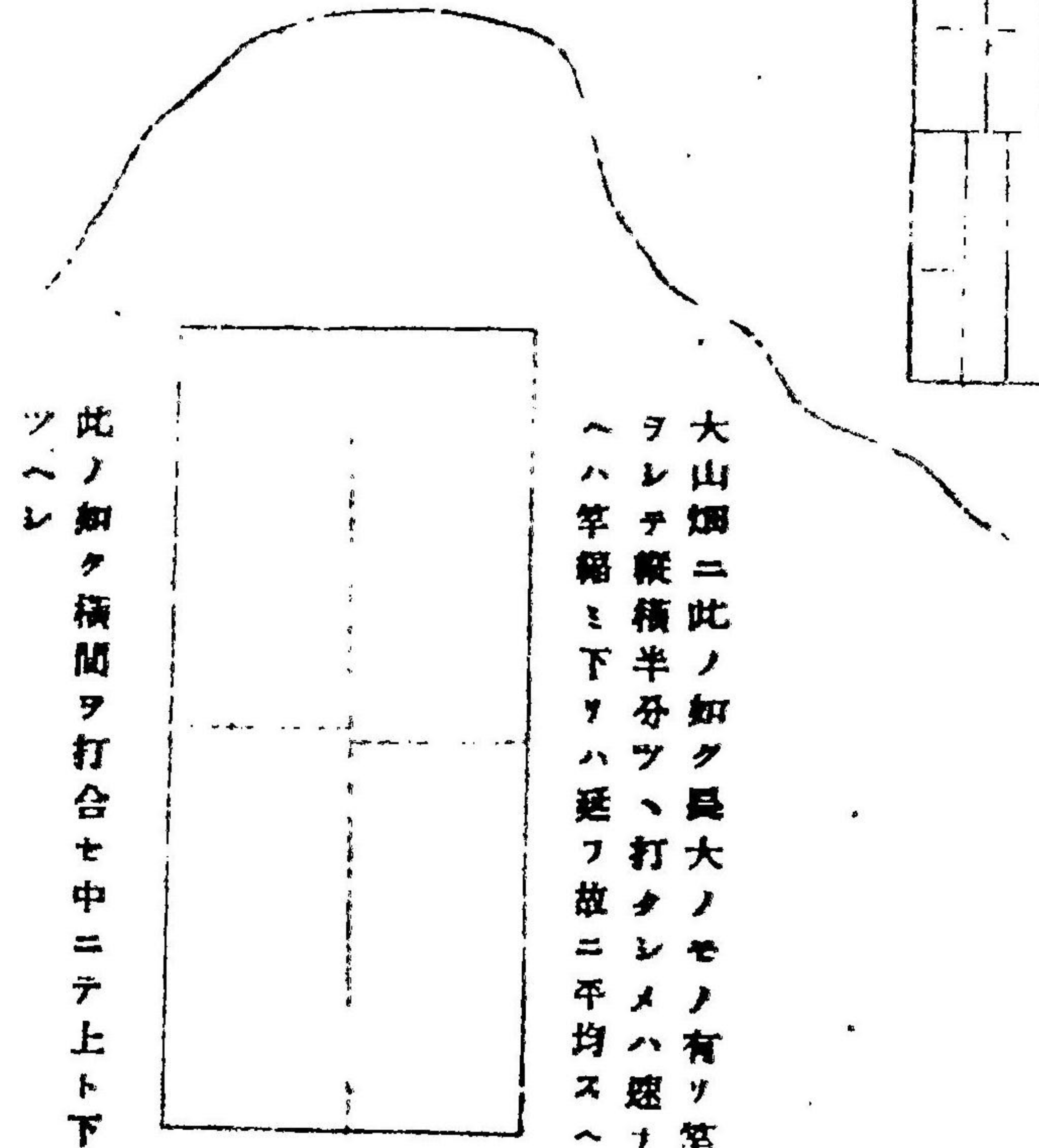


新ノ如ク斜曲ヘルモノハ四切又ハ五切シテ各別ニ打ツ總坪敷ヲ台ヲ作リ歩ト爲ス雖少ク殊ス所ハ見込ナリ

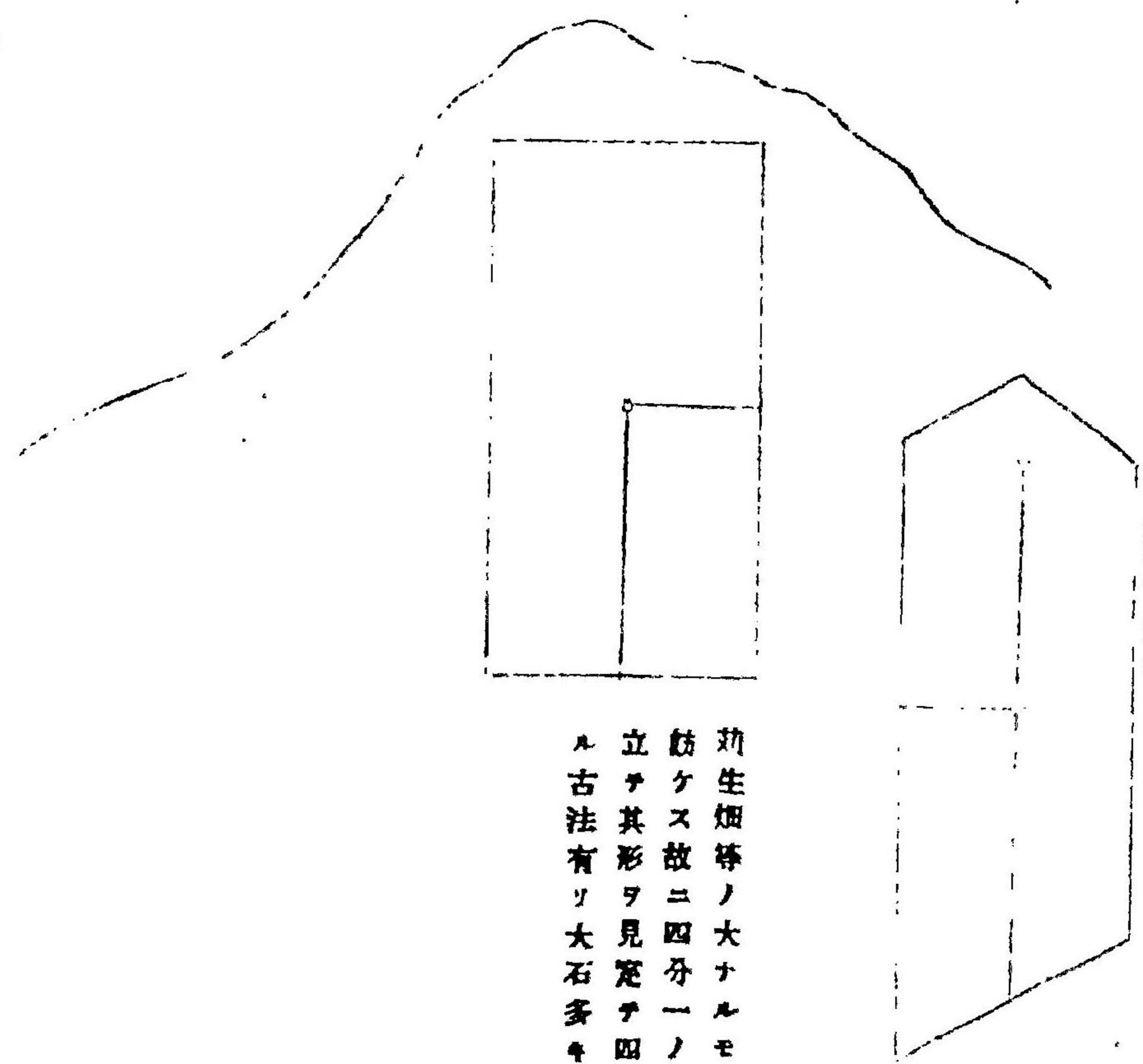


山田ニ臨瀬田ト稱シ此類多シ五歩ト歩ツ、分テ打ツ之ヲ合テ作リ歩ト爲ス様ナリ此類ハ時ヲ飛スヘレ北向ナラハ日ノ當ラサルヲ量テ時傍ヲ少ク寛設スヘレ南向ナラハ之ニ及ハス東西モ寛設スヘレ凡ソ此類ハ肥糞ノ運搬自由ナラス日民家ニ送キモリ多シ又用降レハ肥糞流去シテ損多シ糾酌スヘレ

大山畑ニ此ノ如ク長大ノモノ有リ竿取二人ヲレテ縦横半分ツ、打タシメハ速ナリ且上ヘハ竿縮ミ下リハ延フ故ニ平均スヘレ

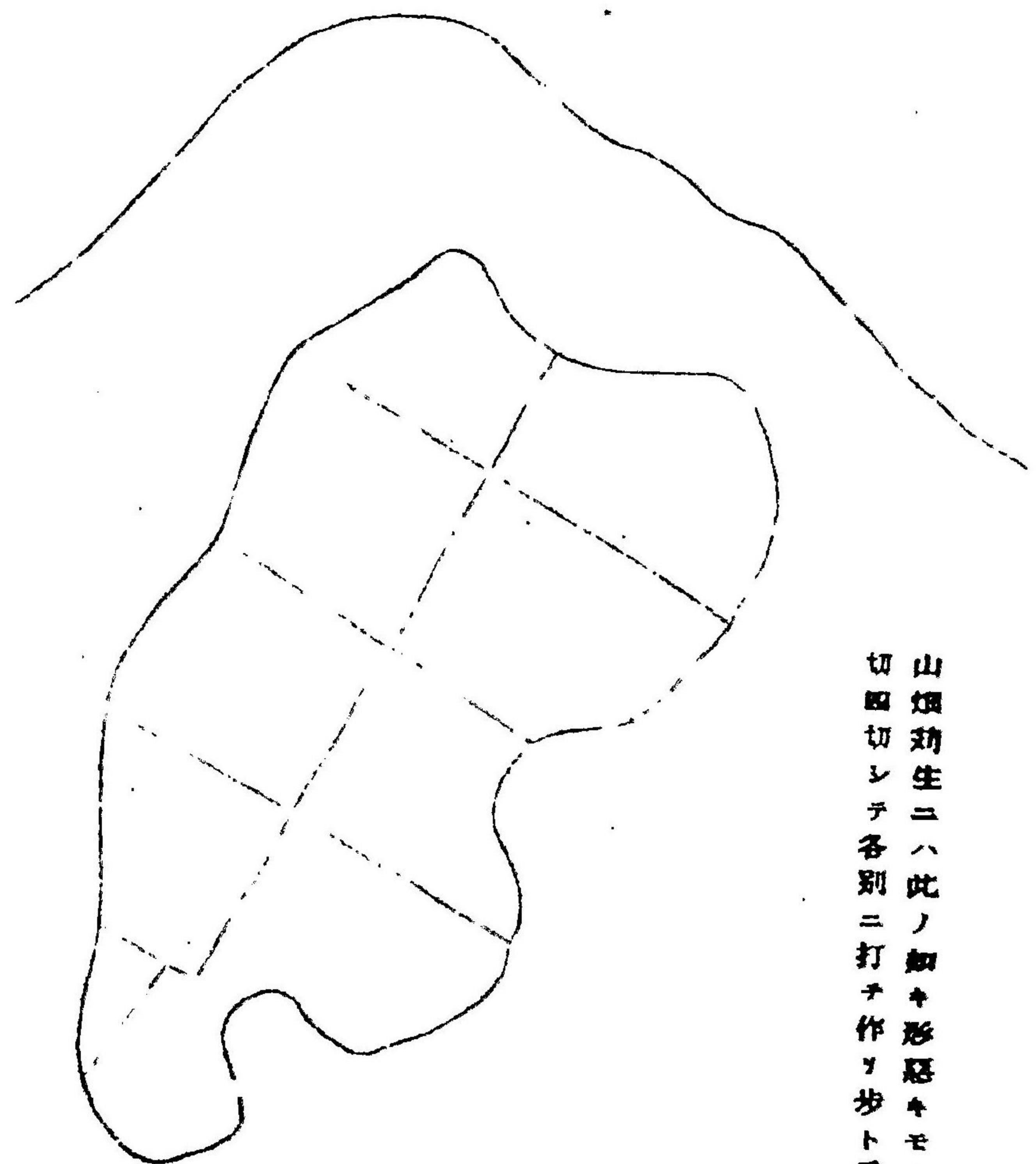


此ノ如ク横間ヲ打合セ中ニテ上下ト二分ツヘレ



見込十字字

功生畑等ノ大ナルモ二十歩三十歩ノ差異ハ
 訪ケス故ニ四分一ノ幅トテ此ノ如ク間隙ヲ
 立テ其形ヲ見究テ四分一ヲ打テ四ノ掛テ用
 ル古法有リ大石多キ山畑ハ特ニ之ノ要ス



山畑功生ニハ此ノ如キ形懸キモノ多ク三
 切四切レテ各別ニ打テ作テ歩ト爲スレ

檢見法

〔按〕檢見法ハ古昔未タ其明文有ルヲ見
法徳川氏ニ至テ始テ其明
ツシメテ見帳ヲ作リ大抵
ト建テ内見メ先ツ小見帳
ト相比シテ差無キハ一差
春法ヲ定ルナシ次第ノ以
之ヲ租税ノ收凡例ニテ實
檢シテ定ルル兼テ收ルリ
畝ノ多寡或ハ遠近ノ盛衰
秣場ノ水繩ノ伸縮ノ便不
用農多寡或ハ遠近ノ盛衰
テ民ノ心ニ遺憾ノ比等至
ルコト苛心ニ遺憾ノ比等
ハ所謂内見ハ坪割ノ概ナ
粉種刈等見有毛檢見異
ハ色取見有毛檢見異
ト檢見ハ村吏先ツ相會シテ取毛ヲ點視シテ一竿限ヲ見

以テ帳簿ニ記シ田畝ニ揚ケタル番札ト比照
テ取テ計テ覆テ視ル順序ニ隨ヒテ上中下各一歩
キ刈取リ收獲ヲ得テハ坪割ノ概ナリ又忽チ其弊
ヲ刈取リニ春得テハ坪割ノ概ナリ又忽チ其弊
文ニ詳リ粉ヲ得テハ坪割ノ概ナリ又忽チ其弊
穂割去リ粉ヲ得テハ坪割ノ概ナリ又忽チ其弊
五畝ハ五勺ト毛一筆限ニ巡テ取テ付リ計テ
出スル謂フ假仕トハ試ニ取テ付リ計テ
々坪刈ノ出合ヲ以テ試ニ取テ付リ計テ
付毛五勺ト毛一筆限ニ巡テ取テ付リ計テ
合穀數ヲ謂フ出合ヲ以テ試ニ取テ付リ計テ
二合毛ト出合ヲ以テ試ニ取テ付リ計テ
合ノ出合ヲ以テ試ニ取テ付リ計テ
フ種刈トハ檢見ノ別段ニ乘止テ檢見ノ別段
ヲ許サハ編入セシムコト然レハ檢見ノ別段
其十分ノ一ヲ編入セシムコト然レハ檢見ノ別段
内見帳ニ編入セシムコト然レハ檢見ノ別段
謂フ又凡例ニ編入セシムコト然レハ檢見ノ別段
見トシテ根取米ヲ磨シ上中下ノ差立テ一竿限

大田本組... 大田本組... 大田本組...

限ヲ以テ一步ニ現穀何合毛ト計テ内見帳ニ記
シ上中下ヲ合算スルナリ遠檢見トハ熟否大不
同無キ所ニ間錯シタル耕種地見トハ一端ヲス
日數ヲ費シ成ハ海處ニ至レハ耕種ノ受ハ時
シ又ハ一ニ懸隔ノ村因弊有テ大ニ檢見ヲ時
諸事失費多ク其如ク或ハ幾何ノ増益等フ出
シ取箇ハ去年ノ審査シテ之ヲ許スナリ旅宿見
内見帳ヲ出サシムルナリ幾何ノ旅宿見帳ヲ出
年ヨリ幾何ノ利益ヲ納ムルコトノ旅宿見帳ヲ出
村ニ到リ幾何ノ利益ヲ納ムルコトノ旅宿見帳ヲ出
給者ニシテ本年ノ出費ハ幾何ノ旅宿見帳ヲ出
正召シテ本年ノ出費ハ幾何ノ旅宿見帳ヲ出
シ去年ノ取米ノ平均ノ比較シテ本年ノ取米
今年ノ取米ノ平均ノ比較シテ本年ノ取米ノ
減シテ定ルナリ亦シテ其年ノ取米ノ平均ノ
無キナリハ引見トシテ其年ノ取米ノ平均ノ
有リハ三石ハ上ノ根取米七斗五升ニ各根取
テハ三石ハ上ノ根取米七斗五升ニ各根取
一步ハ升石トナリハ中下田ヲ以テ之ヲ除ク
一歩ハ升石トナリハ中下田ヲ以テ之ヲ除ク
損毛有テ一步ハ升石トナリハ中下田ヲ以テ之ヲ除ク

ノ根取ニ合足ラス中下トモ不足ノ爲ニ足ナ
通計シテ取米何石ノ不足ノ爲ニ足ナ
ニ改算シテ本段別ノ内ヨリ之ヲ減シテ
ニ根取米ノ段當ヲ乗シテ又田別檢見ト亦之
ヲ段取見ト標準ヲ一々檢見ト分チ根取見ト
フ田檢見ト増減ヲ立テ上中下ヲ分チ根取見ト
ヒ計算了テ増減ヲ立テ上中下ヲ分チ根取見ト
取檢見ト異ナリ是レ上州ニ高崎ニ一村ノ外
ハ之無キナリ即チ其慣習ニシテ一村ノ外
延ト稱シテ合三ノ五民ノ法ノ甚々四六
モトノ稱シテ合三ノ五民ノ法ノ甚々四六
ヲ四斗ヲ得ニ延米四石六斗五升ニ當テハ
石六斗ヲ得ニ延米四石六斗五升ニ當テハ
延ナリ之ヲ普通ノ法ニテ取米ニ當テハ
較シテ算スレハ是レ町三歩ノ取米ニ當テハ
四石六斗ヲ得ニ延米四石六斗五升ニ當テハ
以テ其益ハ是レ町三歩ノ取米ニ當テハ
ノ法ニテ算スレハ是レ町三歩ノ取米ニ當テハ
ノ法ニテ算スレハ是レ町三歩ノ取米ニ當テハ
奇ヲ得ニ其除スル由テ起ル所ト見テハ大
ハ代官自レ其名ヲ由テ起ル所ト見テハ大
人相配シテ數巡視スル由テ起ル所ト見テハ大

限ヲ以テ一步ニ現穀何合毛ト計テ内見帳ニ記
シ上中下ヲ合算スルナリ遺檢見トハ熟否大不
同無キ所ニ間錯シタル新地悉ク見トハ可ラ
日數ヲ費シ或ハ海邊ニ至レハ耕地ノ一燧ヲ
シ又ハ一多ク其村因弊有テ大ニ檢見ヲ受
諸事失費多ク其如ク或ハ幾何ノ増益等ヲ出
シ取箇ハ去年ノ其テ之ヲ許スナリ旅宿ニ見
請願スレハ審査シテ正ノ輩ヲ官ノ旅宿ニ見
年内見帳ヲ出サシテ納ムヘキコトノ旅宿ニ見
村ニ到リ幾何ヲ益テ納ムヘキコトノ旅宿ニ見
給者ニシテ檢見ノ出スヘキ吏胥ノ見トハ小
正ヲ召シテ本年ノ比豐凶并ニ取箇ノ定メ
シ去年ノ取米ノ平均シ其年ノ取箇ノ定メ
減年ノ取米ノ平均シ其年ノ取箇ノ定メ
無キナリハ引見トハ上ノ取米ノ平均シ
有リハ三石トハ上ノ取米ノ平均シ
一步ハ一石トハ上ノ取米ノ平均シ
損毛有テ一歩ノ當リナレハ中下田ヲ以テ
損毛有テ一歩ノ當リナレハ中下田ヲ以テ

ノ根取ニ合足ラ石ノ下トモ不足ナ
通計シテ本段別ノ内ヨリノ不足
ニ改算シ本段別ノ内ヨリノ不足
ニ根取ノ見ト別檢見ト亦日
フ段取檢見ト増減ヲ立ルナリ
ヒ計算ニ異ナリ是レ上州ニ
取之無キナリ是レ上州ニ
ハ之無キナリ是レ上州ニ
延ト稱シ七合三勺五撮ニ
モ四ノヲ得ニ普通ノ五撮
ヲ四ノヲ得ニ普通ノ五撮
石六斗之ヲ得ニ普通ノ五撮
延ナリ算之普通ノ五撮
較シテ算之普通ノ五撮
四石六斗之ヲ得ニ普通ノ五撮
以テ其増益ハ是レ普通ノ五撮
ノ法七斗其増益ハ是レ普通ノ五撮
ノ法七斗其増益ハ是レ普通ノ五撮
奇ヲ得ニ是レ其除スル由テ起ル
ハ代官自ラ巡視スル由テ起ル
人相配シテ自ラ巡視スル由テ起ル

見分合毛付紙札ニ記シ建置クヘシ其内坪川ハヘキ
場所ハ望標ノ爲メ笹竹ヲ建置クヘシ

坪川ヲ爲スニ當テ農民下見分ノ帳簿ト望標トヲ比
較シ坪川ノ合付ニ比シ若シ下見分ニ差謬有ルトキ
ハ百姓ノ過失ヲ依テ小檢見以前百姓等ニ反復懇
諭シテ差違無ラシムヘシ

小檢見ノ坪川帳ニ合付ハ勿論田所ノ字位付畝歩田
主及ヒ稻種ノ名一坪ノ稻一株ノ數一穗ノ粃各幾何
及ヒ粃粒幾何ト委曲帳簿ニ記シテ各實印ヲ取置ク
ヘシ

〔按凡例錄輕履須知等ニ據ルニ一步ノ稻禾關東
ハ率子百二三十株ヲ種ウ其滋地ニ於テハ百七

八十株若クハ二百株ニ至ル然トモ浸漑ニ便ナ
ル處ハ七八十株ニ止ルモノ有リ畿内中國以西
ハ稻株開張シテ多ク種ウ可ラス七八十株若ク
ハ僅ニ三十六七株ニ過キス一株ハ初メ禾苗三
四莖乃至五六莖ヲ併セ種ニ次第蕃殖シテ七八
穂ヨリ二十餘穂ニ至ル一種ノ粟ハ六七粒日
リ百七八十若クハ二百粒ニ至ル處間マ之有
リ皆地ノ肥瘠ニ從テ生息齊シカラサルナリ

坪川ノ時上中下田ハ其三所ヲ刈リ上々下々田有ラ
ハ二所三所酌量シテ刈ルヘシ或ハ村高ニ因リ十五
所二十所ヲ坪川シ損毛多クシテ小檢見爲シ難キ所
ハ三十所四十所ニ及ホスヘシ
坪川粃ハ干減ヲ立ツ可ラス米摺ハ五合タリ若シ干
減ヲ立ル時ハ六合摺ト爲スヘシ
小檢見ニテ引ヲ立ルコト容易ナラス引多ケレハ取